

夏には悲しい出来事が起こる。大学で歴史を学んでいる時、岩場の間を流れる川の煌めきを眺めながらコークを飲む時、バイクに乗って向かい風に引つ叩かれる時、耳の中でボブ・ディランが歌うとき、レイ・クロスはいつもそう思う。

自分が生まれる六年前、ヒロシマとナガサキに原子爆弾が落とされたのは、入道雲の照り映える八月。最初の大量殺戮が始まったのも夏の葡萄の月。そして、大好きな祖父が死んだのも、この一九七〇年の夏。

シェイクスピアがかつて恋人を例えた夏を、レイは炎放射器のように思いながら過ごした。祖父は三日前に死んだ。五歳の時から二人暮らした祖父。レイが持つ、七歳の時の算数の宿題やら、好きな女の子に電話をかける時やら、大学受験やらの記憶には、いつも祖父がひっそり、宝物のように仕舞い続けていた子供の笑みを引き出して立っていた。

何時間も何時間も、レイはかつて祖父のものだった部屋の窓際に座り続けている。祖父の香りはレイを落ち着けてくれたが、それは同時に悲しみも連れてきていた。せめて大学が休みの日じゃなければいいのに、と彼は思う。そうすれば、三日前は埋まっていた祖父の空間を思わなくて済む。しかし、何かしたいと思ってみても、友達に電話を掛けたり、アルバイトに出かけたりする気力は不思議と起きなかった。

夏の陽光が、時間と共に傾いていく度に、二十歳になるまでの記憶が一つ二つと現れる。そんなときは、涙が出るに任せる。

(じいちゃん！ じいちゃん！)と、心の中で呼びかけてみる。

レイ・クロスの父は第二次世界大戦から帰還した後、戦争神経症で自殺した。レイが五歳の時、祖父が寝台の脇の椅子に座ってそう語った。父が死んだあの夜のこと。何故だかやけにはつきりと覚えているあの夏の夜。

「レイや。お前のお父さんはお前が生まれる六年前まで戦争に行っていたんだよ。ノルマンディーで戦って……。それで無事に帰ってきて……。なのに心はちつとも無事ではなくて……。それで死んでしまった。私はね、レイ、何度も行くなと言ったんだ。そしてあの子も行きたくないと言った。レイや、いつかお父さんがお前にしてくれたいあの話を覚えているかね？ あれはね、ずっと昔に私があの子にした話なんだよ。そしてあの子は答えが分かっていた……。なのに私もあの子も勝てなかった。傷ついて帰ってきたあの子はまるで焦るかのように結婚してお前を作った。あの子にとってお前と、お前のお母さんが唯一の光だった。なのに死んでしまった。ああ、オリヴァーどうして自殺なんて……。私やシシーやオリヴィエやお前ではまだ駄目だったのか……」

そう言っただけで祖父は長いこと下を向いた。電灯の光が、祖父の頬の湿りを教えてくれた。あの時は幼すぎて、どうしていつも眠る前に酒瓶を山ほど開ける父が今夜はいないのか、どうして祖父も母も泣き通しなのか、レイにはさっぱり理解できなかった。

死の概念がようやく植わったのは、六歳の時。今度は母がバスの事故で死んでしまったのだ。祖父はもう泣くことすらできずに窓際に呆然として座り込んでいた。父が死んだ夜よりも、少しものを知り、心も成長していた

レイは、今回は母ちゃんがもう二度と会えない人となつてしまったことを理解できた。そして、同時に父もそうであると知った。

一言も喋らずじっと座る祖父の元へ飛んで行って、レイはその膝を小さな拳でポカポカと殴りつけた。怒りが寂しさが悲しみが、それらには似つかわしくない小さな胸から溢れて、涙に、泣き声になった。それを見て、祖父がようやく口を開いた。ようやく涙を流した。

「レイ。レイ」

祖父の細い腕が伸びてレイを抱き上げ、膝に乗せた。イマームのモスクのタイルよりも鮮やかな青い目が、水面の下に揺らめいていた。

「レイ。もう二人ぼっちになってしまったな。お前のお父さんとお母さんを守ってやれなくてすまなかった。今夜はたくさん泣こう。そして朝が来たら前を向くんだ。よしよし、レイ。大丈夫。おじいちゃんがついてる。必ずお前には光り輝く人生をあげるからね。なんの犠牲もなく笑える人生を。大丈夫。おじいちゃんが必ず守ってやるからね」

父は自殺した。母は事故死した。祖母はレイが生まれる前にもう死んでいた。レイは少年の日々を、祖父と共に過すことになったのだ。

祖父と過した少年時代は大半、遊び疲れた後味わう、祖父の手作りの、豚と豆の煮込み料理で彩られる。

「レイや。おかわりは？ もつと食べるか？」

夕食の最中、祖父は五回こう言い、レイは五回ともそれに応える。祖父と食べる夕食はいつも楽しかった。もつとも、祖父の口から「レイ、ところで宿題はすんだのか？」

という文句が流れ出るまでだが。

「じいちゃん。ごはんの前までに宿題終わらせるヤツなんてダセエよ。ああいうめんどくせえもんはギリギリまでやらないのがイキなのさ」

「お前、粋の意味も分かつたらんくせに、生意気言うんじやない。宿題はいずれ終わらせんといかんものだ。早めに取り掛かるに越したことなかるう？」

「だってクレイズのクソババア、出す量が半端じゃないんだよ？ あれじゃ、とてもやる気出ないよ」

「こら、先生をクソババアなんて呼ぶんじゃない」

「じゃ、なんて呼ぶのが正解なの？ お優しいクレイズ先生？」

祖父がスプーンを置いて片目をつぶる。

「ケチでしみつたれ、依怙鼻頂の学費泥棒クソババア。じいちゃんが高校にいた時、いやな先生がいてね、そいつにこう言つてやったのさ」

「じいちゃんは一九世紀生まれなんだっけ？」
七年生になったレイがそう聞いたのは、学校へ向かう車の中でだった。

「そうだよ。じいちゃんがお前くらいの年だった時はね、女の人はみんな長いドレスを着て、男の人はシルクハットを被つた。まだシャネルの服が流行る前だったからね」

「へーえ。なんだか窮屈そうだなあ」

レイは舌を出して運転席の祖父を見る。そんなぎゅうぎゅうカッチリした時代に青春を過したというわりに、祖父は不思議なくらい若々しく見えた。白髪頭に革ジャンとブルージーンズと五十五年型フードがキマッてい

た。学校に着くと、祖父はレイにお弁当を手渡し、人差し指と中指を眉の上で一振りして、フードで仕事場に向かう。そんな時の祖父は、マーロン・ブランドやジェームズ・ディーンよりも不良めいてかつこよかった。

祖父と友達と、売店のコークやカルピコと過す無知な少年時代が過ぎると、戦争の影が激しくレイを襲い始めた。それを強く意識したのは、レイが十八歳の時だった。

寒い冬の夕食時、何気なしにレイはテレビをつけた。映ったのはいつもの退屈なニュース番組で、レイはロクに画面を見ずにチャンネルを変えようと立ち上がった。

祖父の鋭い声が飛んだのはその時だった。

「レイ！ そのままにするんだ！」

画面から凄まじい爆撃音が鳴った。驚いて顔をあげる、と、だから文言を読み上げるキャスターの代わりに、南ベトナムのアメリカ大使館が映っていた。そのそばに、無数の蛆虫のような年若い兵士たちが蠢いている。彼らの中に、銃弾が、爆弾が降り注ぎ、あちこちで火の手が上がる。後にテト攻勢と呼ばれる惨劇が、画面からレイの目に耳に、叩きつけられたのだ。

凄まじい轟音が、人の叫びが鳴り響き、恐ろしいほどの赤色が画面に溢れ、レイは自分の口の端から生温かい液体が流れ出るのを感じた。それが先ほど胃にしまった夕飯だと気づくと、レイは床にへたり込んで液体をすべて口からぶちまけた。

「レイ！ 大丈夫か！」

祖父が飛んで行ってレイの背を摩った。

「じいちゃん。あれは？」

レイが喘ぎながら言った。

「戦争だよ」

「人が死んでた」

「だからそれが戦争なんだよ」

「米兵が死んでた。世界最強の軍隊が……」

「ああ、死んでいった。強かろうが弱かろうが人は傷つくし死んでいく。米兵だけじゃない。ベトナムの兵士も何も知らない女も子供も、取り残された家族も。一体どのくらい死んでいくのか分からないほどだ。戦争とは人が死ぬこと。それ以上でもそれ以下でもない。ただそれだけだ」

祖父が俯いていたレイをまっすぐ座らせた。青い目が、これ以上ないほど強い光を宿していた。

「だがな、レイ。お前も知らんぷりしてはいられんぞ。」

あと二年もすればお前にも徴兵カードが来る。お前もあの中に行くことになるんだぞ！」

「いやだ！」

レイは骨ばった祖父の胸に抱きついた。涙で祖父のシャツが湿る。

「やだよ！ じいちゃん！ 俺死にたくない！ あんな風に殺されたくない！」

そう言って泣きじゃくるレイを抱きしめる祖父の腕は、血が通って温かった。生きている人間の腕だった。

「じいちゃん、俺、臆病だよ……」

嗚咽をゆつくりしまい込みながらレイは言った。祖父の両手がしっかりとレイの頬を包み込み、自分の顔と真正面に向き合わせた。

「臆病者というのはな、時としては英雄になることもあるんだよ」

大学に進学したのが、去年の八月だった。

最初は、レイは進学を諦めて就職を希望していた。祖父には申し訳ないが、老人一人の稼ぎで進学など無理だろうと思っていたのだ。しかし、祖父は強く進学を進めたのだ。

「レイ、これからお前はいろんな人と関わらにやららん。自分の刺激となるような人がたくさんいるのがまず大学だ。大学に行くんだレイ。そもそもお前、ずっと進学を希望しとっただろうが！」

「そりや、進学できたら嬉しいけど、でもじいちゃん金……」

レイはそう苦し紛れに言った。それは聞いた祖父が、「余計な心配をしおって」と呟きポケットから出した預金通帳をテーブルに放った。レイは恐る恐る開いた。そして目に飛び込んだ大量のゼロの羅列に、思わずこむら返りを起こしそうになった。

「金持ちになるには極力金を使わないことがキーポイントだよ、レイ」

祖父がああ不良めいたウインクと共に言った。

祖父の多額の貯金の助けを借りて、レイは州立大学に進学した。十九歳の夏の事だ。

大学は広いところだった。テレビでしか見たことのない光景が、レイの目の前で毎日のように繰り返げられた。デモ、討論会、スピーチ、ロックの流れるパーティー。

「三十歳以上は信用しないことだぜ、レイ」

友人の一人が、酔っ払いながらもすつきりとした声で言っていた。

「ヤツらは俺達ぐらいの年の時に正義の意味を履き違え

やがったのさ。あいつらの頭中は今だって、『ジョニー、銃を取れ！』なのさ。でも俺達はそうじゃないだろ、レイ。俺達の頭中は『ラブアンドピース』さ」

彼はそう言ってまたグラスと喉を傾ける。

『銃を取れ』より『ラブアンドピース』のほうがいいに決まってる。本当は連中だってわかってるんだ。人殺しを楽しめる鬼畜野郎なんて、そうそういないもんだからな。けどな、もう後には引けないから、自分が信じてきたものを否定したくないから、大人は俺達を反逆者なんて呼ぶんだ。レイ。お前のじいさんを除けば、年寄り連中なんてもう当てにならない。俺達がなんとかしなきゃいけない。そのためには何か行動することだ。大勢のデモ集団に紛れるだけだっていい。読んでももらえない文集を諦めずに書くだけだっていい。晩飯のテーブルで、愛国主義者の親父さんに『母国だけじゃなくて世界中が正義なんだ』って怒鳴り返すだけだっていい。バタフライエフェクトを信じるレイ。大きなものってのはな、小さいものが集まってきてるんだ」

レイはやがて、テレビで見た光景の一つになり始めた。デモに参加した。討論会にも出た。スピーチもした。友達にボブ・デイランのレコードを貸してもらった。徴兵カードをライターで焼いた。

「お前の本当の目的は、話し合うことだってことを忘れちゃいかんよ、レイ」

デモから帰ってきたレイに、ある日祖父は言った。

「考えを変えてくれないからって大人達を傷つけたりしてはいかんよ。そういう人達にはな、ひたすら訴え続けるんだ。話を聞いて！ 話を聞いて！ こんな風に」

「ニクソンがカンボジア侵攻を始めたらしいぜ」

そんな声上がり始めたのは今年の四月の事だった。国中の大学生の間に、さざ波がじわじわと立ち込めた。

「ベトナム戦はもう終わらんじやなかったのか!! カンボジアになんか攻め込んだら戦争がもつと続いただけじゃねえか!」

レイや他の学生達は皆いきり立った。大規模なデモ集会が集会場で行われた。仲間の中には、パトカーに火炎瓶を投げつけたり、繁華街で暴れたりする者もいた。州知事は大学生らを強く批判するようになった。

五月四日の、大学での抗議には、二千人余りが集まった。庭の勝利の鐘が打ち鳴らされると、レイや他の学生は声を上げ始めた。抗議の音が激しくなっていくにつれ、大学の前に陸軍や警察官が群れを成し、やがて彼らに解散を迫った。学生らは石礫でそれに答えた。

「待って待って! やりすぎだってお前ら!」

レイは慌てて叫んだ。
解散の意思なし、と見たのだろうか。やがて重々しいライフルを構えた州兵が七十人ほど、集会場に向かって前進を始めた。

「みんな外だ! 集会場を出るんだ!」

学生のうち何人かがそう叫んだ。やがてレイや他の学生達は押し合いへし合いしながら講堂を流れ出て、近くの広場へ向かった。州兵はまだこちらに向かつてきていたが、学生達の一部は再び石や催涙ガスを彼らに向かって投げつけ始めた。

「馬鹿やめろ! やめるんだ! 話を聞いてもらいたいんだろ! ならこんなことしちゃダメだ!」

レイは必死に興奮する学生達を諫めた。

「やれ! やれ! やっちまえ!」

レイの声をかき消して、彼らは熱狂し続けた。彼らの胸の中の鼓動が、体を突き破ってドクンドクンと大気を揺るがすかのような激しい高ぶりが、若者達を包んだ。空気が燃え上がるかと思われるほどだった。

「おい、見ろ!」
学生の一人が上ずった声を突然あげた。

「アイツらしっぽ巻いて逃げてくぜ!」

見ると、州兵達は何を思ったか踵を返して空の集会場の方へ背を向けて歩いて行ったのだ。学生らが歓喜の声をあげた。レイはひりひりする喉に暖かい息を通した。

「よかった。分かってくれたんだ……」

「おい! もうそろそろ集会場の方へ戻ってもいいんじゃないか? スピーチの続きをやろうぜ!」

一人がそう言った。みんなが口々に「そうだな」「戻ろう」「なんか結構呆気なかったなあ」などと言いながらぞろぞろと歩き出した。レイはゆっくりと歩いた。昼過ぎの暖かい空を見上げた。

「腹減ったなあ」

のんびりとそう言った。

レイが空を見上げている最中にその一番最初が起こった。

パン!と乾いた音が鳴った。

(誰かがダイナミックな放屁をなすつたみたいだなあ。まるで銃声じゃないか)

レイはそう思った。

学生の間へのんびりとした空気が流れた。レイは顔を地上のほうへ戻した。州兵の一人が、四十五口径のピストルをこちら側に向けていた。火薬の匂いが風に乗ってレイの鼻に届いた。

州兵が再び銃を構えた。『パン』が立て続けに鳴り響き、

あたりに白い煙と焦げ臭い匂いが立ち込めた。一旦は冷静になった学生達を、やがて悲鳴が包み込んだ。

呆然と立ち尽くすレイの周りで、狂乱した学生達が必死に後ろに逃げようと蠢いた。しかし、彼らの背後にライフルの銃弾がさらに降り注いだ。一人の学生が地面に倒れるのが見えた。

(ジェフリー・ミラー!)

一度、一緒のテーブルで昼食をとったことのある男子学生だ。レイの頬がじわりと湿った。やがて、抓れば水滴が滴るかと思われるほどぐっしよりと濡れた。

「やめて! やめてくれよ!」

レイは叫んだ。背中を向けず、自分と年もそれほど変わらないかと思われる兵士達を真っ直ぐに見つめて。

「お願いだ、やめてくれ! 話を聞いてほしいだけなんだよ! 頼むよ! 殺さないでくれ! 話を聞いて! 話を聞いてよ!」

続けて三人の学生が地面に倒れた。絶叫が空高く立ち上る中、銃弾の音がパラパラと静かに止んでいった。

四人の若者達の体から、熱く燃え立つ血が、坂道に沿って流れ出ていた。レイは銃声が止んでもまだ叫び続けていた。学生達の叫びがやがて怒りに変わり始めた。水中から聞こえるような、くぐもった怒声が響き渡る中、それを切り裂くように鋭い大人達の声が、突然あがった。

「やめろ! やめるんだ諸君! これ以上暴動を起こしちゃいかん! 今は堪えて立ち去るんだ!」

数名の教授達が、青い顔で走り寄ってくるのが、レイの霞む視界に映った。

あれからどうやって家に帰ったのか、レイは今ではど

うも思い出せないが、あの銃撃の後に繋がる記憶は、リビングルームのドアを開けた先にある祖父の青ざめた顔で始まるのだった。

「レイ！」

祖父はレイの姿を見るや否や、涙を流して抱き着いてきた。肩越しに、テレビに映るニュース番組が見える。

「大丈夫か!! ケガはないか!! さっきニュースを見ていたんだがいきなりお前の大学が映って……銃撃があったと言っていたんだ。十三秒銃声が鳴り続いて負傷者がたくさん出たって……」

「十三秒!!」

レイは祖父の腕の中で絶句した。

(たったの十三秒!! たったそれだけの間でジェフリー・ミラーやアリソン・クラウスは殺されたのか!! 俺には何十時間にも感じられたのにたったの十三秒!!)

レイは、十四年前から絶えず彼の涙を吸い取ってきた祖父のシャツに顔をくっ付けて泣いた。祖父の手が、十四年そうだったように、彼の背を摩った。

「じいちゃん、俺怖かったよ。銃を向けられるってあんなに怖いことだって、俺知らなかった。人が殺されるとこ、テレビで何回も見ただけなのに、俺本当はよく分かってなかったんだ。でも今日で分かった。俺、やっぱり戦争には行けない。俺には無理だ」

「そうか……」

祖父が突然レイから体を離れた。その細い腕からは想像もできないほどの力で、レイの肩を強く掴んだ。

「レイ。お前、友達を撃ち殺したあの州兵達に復讐したいと思うか? お前が怖い思いをしたのも知らないで、呑気にテレビを見ていた私や他の人達に、同じ思いをさせてやりたいか? お前と違うことを喋る人達を殺した

いか? ジェフリーやアリソンの代わりに、私が死ねばいいと思っただか?」

優しく穏やかな祖父が、突然見せた激しさにレイはたじろいだ。それでも、言うべき答えはもう出ていた。テレビで初めて戦争を見た時、それともっと幼い時か、そのどこかでもう答えは出ていた。

「じいちゃん。そんなことしたって何の答えも出せないよ。俺がやらなきゃいけないのはそういうことじゃない。俺は悲しまなきゃいけないんだ。悲しんだ上で、どうするかだよ」

祖父の手から力が抜けた。気づけばレイはまた、湿った祖父のシャツに包まれていた。

「お前はすごい子だなあ、レイ。私もオリヴァーもやり遂げられなかったことを、お前ならやるかもしれないなあ」

「とにかく、この一年で俺の周りで人が死にすぎたんだよな」

レイはそう軽く、まるで友達の人に喋りかけるかのように言っただけだ。わざとらしい軽快な声は、がらんと静かな部屋の壁にあたって跳ね返り、レイの鼓膜をびしゃりと打った。弾むような声が、誰に拾ってもらえることもなく、もう一度耳に戻されたのを感じて、レイは余計に寂しくなった。

あの銃撃事件から三か月、今度は祖父まで死んでしまった。祖母も父も母も、そして祖父も過去の人となってしまったのだ。レイは本当に独りぼっちになった。

「おじいちゃんが必ず守ってやるからね」

そう幼いころ言った祖父は、夏の午後、病院の白いシートの上で、どこかに行ってしまった。レイと、彼が

アルバイト代で買った祖父の誕生プレゼントの、ネクタイ止めを残して。

レイは、水分を含みすぎて色あせてしまったジーンズの上に額をつけて咽び泣いた。

(ああ! 酒が飲みたい!)

心の中で叫んだ。

(煙草が吸いたい! 酒が飲みたい! 薬をやっときやよかった! じいちゃん! 俺はあんたが思うほど強い人間じゃないんだよ! 今だって寂しくてたまらない! 今すぐ何か欲しい! じいちゃんもばあちゃんも父さんも母さんも、そっくりそのままみんな欲しい!)

もう大人のくせにこんな駄々っ子のようなことを思うなんて、と心のどこかで思ったが、それでもレイは誰かを欲せずにはいらなかった。この胸の内を、誰かにぶつけ、出来た隙間を埋めてほしかった。

そう思ったその時、玄関のベルが突然鳴った。

レイは慌てて涙を拭き、廊下へ走り出た。再びドアベルが鳴る。どこか明るく陽気な音だった。今日は一日中玄関のベルが鳴っていたのだが、この音は何となく、ほかの物とは違う暖かな音に感じられて、レイは先ほどの胸の重たさから解放されたように思った。ほんの少しだけ、亡き祖父の気配がドアの向こうにいた。

「はい!」

そう言って勢いよくドアを開けた。しかし、玄関ポーチに立つ客人を見た時、レイはがっくりと肩を落とした。立っていたのは、祖父とは似てもつかないずんぐりとした中年男と、いかにも偏屈そうな老人だったのだ。

「おめえがレイ・クロスか?」

中年男が、安物ビールとラッキーストライクを緋い交ぜにした安っぽい息をまき散らして言った。

「そうですか？」

「おっ！ よかった！ 住所間違えてなかったみたいだな！ よう、レイ。俺はステイブン・スタンプス。こっちのじいさんは、俺の親父のパーシー・スタンプス。まあ、軽く言っちゃえばお前の遠い親戚にあたる」

「親戚？」

レイの眉頭が眉間に寄せられた。今日一日中、彼をいらだせたこの文句は、レイの忍耐と他人への行儀を一気に総崩れにした。彼は、呑気そうに「親戚」などと言ったステイブン・スタンプスに怒鳴りかかった。

「おおそうか！ 俺の親戚だって名乗るヤツは今日でおめえらが六組目だよ！ 俺のじいちゃんの遺産は誰にも渡すつもりはねえ！ とつとと失せな！」

「まあまあまあ、レイ。落ち着け。とにかく一度話を聞いてくれよな。中でゆっくり話し合おうぜ」

ステイブンが片手をぶんぶんと前後に振った。レイはふと、その仕草に、ドアベルが鳴った時に感じた祖父の気配を取り戻し、張り詰めていた喉をふっと和らげた。その時、その心の緩みを気取ったのか、ステイブンとパーシー老人がぐいっとレイを押しつけ、家の中に入り込んだ。

「上がらせてもらおうぜ」

「おいコラ！ 勝手に入んじやねえ！」

レイは慌てて二人の後を追った。その時、前を歩くパーシー老人が、片足を引きずっていることにレイは気づいていた。

（パーシー？）

片手を額にやっつけてしばらく下を向いた。
（どこかで聞いたことあったような……）

「まず、おめえと俺達の血の繋がりに説明しようじやねえか」

テーブルを挟んで座ったステイブンが、肉の厚い両手を打ち合わせて言った。隣では、パーシー老人がむっつりと黙り込んでいる。

「まずおめえんとこのばあさん、エリザベス・クロスについてだ」

「え……？ なんてばあちゃんの名前を……」

「エリザベスは俺の従姉だった人だからだ」

そう答えたのはパーシー老人だ。レイはあんぐりと口を開けた。

「従姉!？」

「そうそう。だからこのパーシーじいさんから見たらお前は……えーと、何になるんだ、親父？」

「知らん」

老人が再び黙り込むのを見て、ステイブンは困った顔をし、続けた。

「ま、これで俺達が真正銘の親戚だつてことはわかっただろ？ 問題はこれからだ。実は、二か月前くらいにおめえのじいさんから手紙が来てな」

ステイブンが鞆から出した封書を、テーブルの上に置いた。レイはそっと取り上げて中の便箋を出し、開いた。流水のように美しく懐かしい祖父の字が、紙の上に並んでいた。

「心優しいスタンプス家の皆さま。妻の血筋と昔の友情を頼りに申し上げます。どうか孫のレイを養子にとってください。私は医者に死期が近いと言われた身。心残り。はただ孫のことだけです。あの子はもう二十歳ですが、私が死ぬば心の負担はかなり大きいでしょう。ですから

どうかあの子を、私の希望をよろしく頼みます。皆さまの優しさにお縋りして申し上げます」

手紙を読み終え、レイはそっと呟いた。

「じゃあ。じいちゃんは……」

「ああ、そうだ」

レイの呟きに、ステイブンが答えた。

「お前にレイ・スタンプスになってほしいと言ったんだ。まあ、つまり、その……な。レイ、改めて言うぜ。お前、俺達の家族にならないか？」

ステイブンが陽気そうな赤ら顔に、照れたような笑みを浮かべてもじもじと身じろぎした。レイはそんなステイブンをぼんやりと見つめた。誰かが欲しい欲しいと思っていた丁度その時に、新しく家族になろうと言う人達が現れたのだ。そのあまりの突拍子のなさに、レイは素直に喜ぶことが出来なかった。

（この人達を信用できるか？ たった数十分前に出会ったばかりの人達なんだぞ。そんな人達と家族になんてなれるのか？）

手の中の手紙を強く握った。その時、「レイ」と呼びかける声が頭上でした。顔をあげるとステイブンが、照れくさそうな笑顔に優しい表情を加えて、レイを見つめていた。その表情があまりにも亡き祖父に似ていた。このずんぐりとした中年男と不愛想な老人に、レイはふと自分と同じビートを刻む血の流れを感じた。

「まあ、驚くのは分かるぜ、レイ。よく知りもしないヤツらといきなり家族になろうだんざ、言われても困るよな。でもよ、レイ。俺はこの手紙貰った時、嬉しかったぜ。お前のじいさんが俺達をお前の家族に選んでくれた。俺と女房には、もうずっと長いこと子供が出来なくてな。そりゃ、欲しくて欲しくてたまらなかったが、こ

ればつかりはどうしようもないだろ？ だからずっと諦めてた。だけどよ、レイ。お前のじいさんはそんな俺達に、すごく嬉しいことを言ってくれたんだ。だから、お前が俺の息子になってくれたら、そりやもう天に昇るほど、幸せな気持ちになるんだがなあ」

そう言つてステイブンは、笑う丸々肉づいた顔に、深く寂しそうな表情をほんの少し浮かべた。それを見た時、ふとレイの耳の奥で祖父の声がした。

「大丈夫だよ、レイ。大丈夫」

（そっだ確か……初めて行く学校が怖くて泣いていた俺に、じいちゃんがこう言ってくれたんだっけ……）

レイは、ステイブンとパーシー老人を交互に見つめた。

大丈夫だよ、レイ。大丈夫。

もう一度、祖父の声が耳に響いた。

「本当か!! レイ、本当にいいのか!!」

ステイブンの歓喜の声が部屋に響き渡った。途端に彼はテーブルを迂回して、レイの細い体を折らんばかりに、その巨体で抱きしめた。涙で濡れたひげ面が頬に押し当てられた。

「親父、聞いたか!! レイが俺の息子になってくれるって言つたぞ! 俺の息子だ! 親父! 親父にも孫が出来たんだぜ! ああ、俺の息子だ! 俺の息子だ!」

レイは、毛むくじやらの腕越しにパーシー老人を見た。不愛想に引き結ばれた口の端が、ほんの少し、緩んでいた。

レイ・スタンプスの最初の一週間が、あつと言ふ暇のないほどあわただしく過ぎた。役所での手続きやら、引

つ越しやら、荷ほどきやらを経て、天涯孤独の身となつていたレイは、四人の家族を得たのだった。

スタンプス家の人々は、物腰柔らかだった祖父とは打つて変わつて、とにかく騒がしく、粗野な面もあるが、その粗つぽさがレイにとっては、不思議と心地よかつた。

彼らは手続きが一段落すると、さつそくレイを遊園地に連れ出した。何十年も前に、家族そろつて出かけるという機会を失つていたレイにとつて、この遊園地遠征ほど心に染みるものはなかつた。

「レイ! 次はあれに乗るぞ!」

「レイ! こつち向いて! 写真がうまく撮れないですよ!」

「レイ! お前お腹が空かないかい? おばあちゃんがアイスを買ってやるのか?」

「レイ! そんなに早く歩くんじゃない! 転んでケガをするぞ!」

引つ切り無しに呼ばれる「レイ!レイ!」という言葉が素直に嬉しかつた。

一家とはすぐに馴染んだが、それでもパーシー老人は少しだけ取っ付きにくかつた。しかし、時が経つにつれて、彼も次第に祖父らしい言動を見せるようになった。

「ふん! 最近の若いもんは貧弱で見られたものじゃない! ほら、レイ、もつと食べんか! 嫌とは言わせんぞ!」

彼は夕食の時に、五回そう言うようになった。

「あの子が元気になってくれて本当によかつたわ」

ある夜更け、母が父にそう話すのを、レイはトイレに立ち寄つたついでに聞いた。

「小さい時に二両親亡くされたんですつてね。おまけにあの銃撃事件にも巻き込まれて、大好きなおじいちゃん

まで死んじゃつたなんて、いくら二十歳とは言つてもあんまりかわいそうだわ。でも最近は何が笑う時が増えてきて、心が落ち着いてきた証拠ね」

「ああ、本当によかつた。あの子はもう俺達の子なんだから、俺達もしっかりしないとなあ」

「レイ、そろそろお前、じいさんの遺品の整理したほうがよかねえか?」

父がレイにこういったのは、ある日曜の朝食の時だった。

「そうよ、レイ。そろそろ始めなくっちゃ。あたしも手伝うからさ」

母がそう答えるのに、レイはそつと頷いて返した。亡き祖父が生前大切にしていた物を改めて見るなど、つい最近まではつらくても出来たものではなかつたが、今ならきつと大丈夫だ、と彼は思った。

昼頃、父の運転するトヨタ・カローラに母と一緒に乗り込んだレイは、懐かしい元の家へと向かつた。

「今日はたぶん小さいものしか運べないだろうな。まあ、仕方ない。そうだ、レイ。片付けが一段落したら爺さんの墓参りにも行こうか。色々話すことあるだろ?」

父の言葉にレイは頷いた。

（新しい家族とうまくやつて言わなきゃな。パーシーじいちゃんは少し気難しいけど!）

レイは一人で口元を押さえてくすくす笑つた。片足を引きずりながら台所を歩き回り、ぶつくさ小言を言いながらお茶を淹れるパーシー老人を思い出し、ふとレイは父に話しかけた。

「ねえ、父さん」

「あん？」
「パーシーじいちゃん、ずっと足を引きずってるけど、ケガでもしてるの？」

「ああ、あれか……」
父が生来陽気そうな顔を。少しだけ曇らせた。

「あれはな、親父がお前くらいの年の時に、第一次世界大戦で受けた傷なんだ」

「戦争で……」
「ああ、そうだ。……なあ、レイ」
父の声に不安げな色が混じった。

「お前、確か反戦主義だろ。最近の若者はみんなそうだよな。ああ、いや、別にそれがいいとか悪いとか言うてるわけじゃないんだ。ただ、そうだとしたら、親父の戦争体験を聞きたいって言いだすかもしれないと思ってるなあ、レイ。すまないんだが、親父に戦争のことを聞くのは極力避けるようにしてくれないか？ 親父は俺にもお袋にも、自分の若い時の話をあまりしたがらなくてな。俺だって最近まで知らなかったんだぜ？ 親父の古い友達のこととかさ……」

「パーシーじいちゃんの友達？」

「ああ」
赤信号を見た父が急いでブレーキを踏んだ。反動でレイの上半身が三十度ほど前へ屈む。

「お前のじいさんのことさ。高校生の時、俺の親父と同級だったんだと」

片付けは、父が居間、母がキッチン、レイが祖父の寝室の担当となって始まった。

サイドテーブルに置きっぱなしのマグカップや、壁に

飾られたレイの子供の頃の写真を見る度に、目頭が熱くなった。しかしその度に聞こえてくる両親の、「なんだこれ!!」だの「レイ! これってどうしたらいいのお!!」だのといった声のおかげで、レイは長いこと泣かずに済んだ。

部屋の片づけが八割方終わると、レイはクローゼットの掃除に取り掛かった。中に仕舞い込まれていた衣服は、大方はきちんとハンガーにかけられていたが、中にはくしゃくしゃに丸め込まれて押し込んだだけのものもあった。

(さてはじいちゃん、見えないところは手抜きしてたな……)

レイは苦笑しながら、中の衣類を引っ張りだしては畳んで床の上に置いた。ものの十分で、クローゼットはほぼ空になった。痛んだ腰に手をやり、伸ばしていると、外から母の声が聞こえた。

「レイ! あんたちちよつと休憩しない? ジュース買ってきてあげようか?」

レイは最後に大きく腕を回すと、「ああ、お願い!」と大声で返した。母の足音が遠ざかると、レイはもう一度クローゼットの中に入り込んで、自身の最終確認をした。その時、レイはクローゼットの角にびったりとくっつくようにして置いてある小さな木箱に気づいた。

(なんだらう? これ)

取り上げてみると、中でカタカタと小さな音が鳴った。レイはクローゼットから這い出ると、祖父の寝台に腰かけ木箱を開けた。写真が一枚入っている。相当古い白黒写真だ。茶色く変色した紙から、チョコレートのような甘い香りが仄かに香ってくる。

映っているのは、千鳥格子柄のスーツを着て鳥打帽を

被った五人の青年だった。二十歳くらいだろうか。レイは何気なしに彼らを眺めた。古ぼけた写真の中の、白く光りの当たった笑顔を見つめている内に、レイはふと、彼らのうち二人に見覚えがあることに気づいた。

一人は濃い髪色でなかなか容姿のいい青年。唇の吊り上げ方と凛々しい眉が誰かに似ている。

もう一人は、写真では白いがおそらくブロンドの髪の毛の青年。彼は五人の中でも取り分け顔立ちが美しく、頬に浮かんだ窪みが、何とも言えない魅力を醸し出していた。

レイは高鳴る心臓を押さえて写真をめくった。そこには、もう何十回何百回と見た流水のような文字が、鉛筆で書かれていた。

「一九一七年。四月二日。写真館でみんなと。ロバート、アレック、パーシー、ジェームズ、ゴードン」

レイの肺から口へ、熱い息が漏れた。

(間違いない! このブロンドの人、じいちゃんだ!)
で、こつちのブルネットがパーシーじいちゃん!)

レイは、二人の祖父の若かりし頃を、高鳴る心臓と共に、わくわくしながら眺めた。

(へーえ、じいちゃん、すっごい美青年だったんだなあ。
パーシーじいちゃんもイケてるし、こりや二人とも女の子にモテただらうなあ)

つくづく、青年の亡き祖父の整った顔を眺めていると、レイはふと、彼の左隣に立つ青年に目を止めた。少しうねりのある黒髪の、幼い顔立ちをした青年だ。正面を向いて笑っているが、細められた目の端は、隣の亡き祖父をじっと見つめている。この人はどこかで見た記憶が一つもない。それなのに、何故か懐かしい思いがふつと湧いてくる。

レイはそっと写真を裏返した。祖父の字が流れる中、

一つだけ、「アレック」という文字が異様にはつきりと目についた。

(アレック……)

その時、レイの頭に、祖父ではなく、遠い昔に死んだ父の記憶が蘇った。あれは確か、父が死ぬ少し前だった。レイのベッドに腰かけて、彼は長い話をしたのだ。

「小さいお前にはまだわからないかもしれない。でもな、レイ。父さんの話を聞いてくれ。父さんがまだ若かった頃、おじいちゃんが語って聞かせてくれた話だ。そう、おじいちゃんがまだ男の子だった時の話だよ」

「そうだ、あの話。あの時は幼すぎて一体何の話をされているのか皆目見当もつかなかったが、それでもやたらと印象に残ったあの話。この写真を見るまで、幼かった頃の記憶に置き忘れていたあの話」

レイは寝台からゆらりと立ち上がった。冷たい汗が、夏のむっとした熱気で火照った肌を、たちまちに冷やした。

「そうだ、俺すっかり忘れてた……」

ポツリと呟き、手の中の写真を強く握った。

「どうしてアレックは自殺したんだ……？」

一頻りの片づけと墓参りを終えると、レイと両親は家に帰った。疲れた疲れた、などと口々に言いながら廊下を歩いていると、台所から豚と豆の煮込み料理の、香ばしい匂いが漂ってきた。

「おーい、お袋！ メシまだー？」

「あと一時間は、ひもしい思いをするこったね！」

父と祖母が大声で言い交すのを聞きながらレイが手を洗っていると、母が洗濯籠を持って洗面所に現れた。

「レイ！ 悪いんだけど、ご飯出来るまでおじいちゃんの相手してきてくれない？」

「じいちゃんのこと……ああ、うん、別にいいよ」

レイのジーンズのポケットの中で、あの写真がカサリと鳴った。

「はい、じいちゃん！ おやつせびりに来ましたよ！」

「なんだ、お前か」

陽気にやって来たレイを、小卓に向かって腰かけていたパーシー老人が不愛想に出迎えた。

「ふん、最近の若いもんは遠慮というものを知らんようだ」

「そう言うって彼はどっころらしよと立ち上がり、片足を引き摺りながらベッドの脇の戸棚まで歩いて行った。そしてガラス扉を開けると、綺麗な唐草模様のクッキー缶を取り出し、レイをテーブルのそばの椅子に座らせた。」

「最近の菓子はまあ固くってかなわん。年寄りのことなど微塵も気にかけんわい。というわけで、お前半分手伝え」

「おつ、マジで？ ありがとさん、じいちゃん！」

花の形をしたクッキーを一つ手に取り、口に放り込むと、舌で一押ししただけでほろほろと上品に崩れた。向かいのパーシー老人からも、トッピングのナッツをかみ砕く音が、サクサクと元気に聞こえてくる。そんな彼を苦笑して見つめ、レイは面白半分に行った。

「じいちゃんの口癖は『最近の』だね。俺らの世代のものは嫌いなのか？」

その時、パーシー老人の咀嚼音がピタリと止まった。「カウンタカルチャーのことか？」

静かな声が、レイの耳をひんやりと包んだ。レイは、噛みかけのクッキーの欠片を喉に引つ掛けたまま、しんと黙り込んだ。

「あんなのはくだらん」

老人パーシーは続けた。

「何が愛と平和だ。本物の戦争を知らんくせに、一丁前に綺麗ごとを言いよって。あんなのに酔いしれる連中にロクなのはおらん。どうせ、薬と酒と、見境ないカーセックスが目的の不良集団だ」

レイは喉の欠片をそっと飲み込んだ。

「戦争のことを聞くのは極力避けるようにしてくれないか？」

「そう言った父に申し訳なかった。しかし、写真をみてから、あの話を思い出してから、そしてこの老人の言葉を聞いてから、レイは自分がせねばならないことが分かっていた。」

聞かなければならない。亡き祖父とは違い、この人はきつと自分から話そうとはしないだろう。ならば、こちらから聞かなければならない。亡き祖父や亡き父の話だけでは足りない。この人の見たものも知らなければ、答えは出せないような気がしていた。アレック・バルダーソンの答えも、過去や今や未来の答えも……

「じゃあ、じいちゃんは……」

レイは静かに、真っ直ぐ言った。

「じゃあ、じいちゃんは本物の戦争を知ってるんだね」老人は何も答えなかった。レイはそつとあの写真をテーブルの上に出した。

「俺のじいちゃんがね、父さんに話したんだ。戦争とアレック・バルダーソンのこと。そして父さんも俺に話した。愛する私の息子よ、何故お前にこんな話をしたのか

わかるかね？　こう締めくくって」

「ロバートが話した!!　ロバートが!!」

老人が荒々しくレイを睨んだ。

「バカバカしい!　ロバートに何が話せるというんだ!

ロバートはアレックの何を知っていたというんだ!

何も知らずにいたくせに!」

「そうだよ、知らなかった。だから考えたんだ。そして俺や父さんにもそうさせた。話すことだね」

レイの若々しい瞳は、老人に注がれたまま離れなかつた。この人から聞かなきゃいけない。聞いて考えなきゃいけない。

「じいちゃん。ステイーブン父さんからは止められたけど、やっぱ俺、じいちゃんの口から聞いてみたい。戦争のことも、アレックのことも」

パーシー老人はしばらく動かなかった。しかし、やがてそっとテーブルの上の写真を手にとって眺めた。

「きれいだなあ。本当に。いつ見てもきれいだ。この写真の中は」

やがて、パーシー老人の瞳が、写真からレイに移った。

「お前は本当にロバートにそっくりだなあ。あの頃のロバートに。若くて無知で、世間知らずのあの頃。レイ。

若い頃の俺達はみんなそうだった。俺もロバートもアレックもジェームズもゴードンも。なんだって出来る気がしていたんだ。挫折することも、死ぬことも、怖くなんてなかったんだよ」

俺の生まれたあの町は、鉄工場のずらりと並ぶ、灰色の空の下にある小さな町だった。親父もその工場の一つで工員をしていてな。金持ちの乗るフォード車の部品な

んか、油まみれで作ってた。

俺とアレックとジェームズとゴードンは、そんな町で生まれ育った。不自由することも、飽くほど満足することもない月並みな町で、俺達は夢中で遊びながら大きくなった。そんな俺達のお気に入りの遊びは、何と云ってもアレックの自作の詩を聞くことだった。十歳でランボ

ーを知ったという、少しませたアレックの詩は、少し拙いながらも、言葉が素晴らしかった。そこらあたりのゴミ捨て場を、ミレーやマネの絵画の一つに変え、普段通りの灰色の空を、青く晴れ渡らせた。言葉だけでも胸躍るアレックの詩を聞くと、どこか遠い異世界に旅している気分になったものさ。

アレックの、ロマンの詰められた宝石箱のような心は、一つ人生を歩むごとに、ぐんぐんと肥大していった。彼の書く詩の端々から、それが感じられた。そしてその宝石箱が弾けんばかりに膨らんだ十四歳の時、アレックと俺達の人生に、ロバート・クロスが登場した。

彼は転校生だった。鉄工場をまとも上げる会社の社長である父親の、事業拡大だかそんな理由で住居を変えたらしく、そのため前いた学校から移ってきたのだった。

つまり、お前のおじいちゃんは大変な金持ちだったのさ。彼が教室に初めて入ってきた時、アレックを始めとした俺達は、思わず目を見張ったよ。もちろん、金持ちの子が珍しかったということもあるが、それより目を奪われたのは、彼の美しさだった。初めてだったよ。「美しい」という言葉が男にも使われるんだと知ったのは、この写真からも分かるだろう?あの時のロバートは、この美しさに加えて全身に瑞々しさを纏っていた。お前が知っているロバートにはなかった、あの年頃の子供特有の、無条件な潤い。そんな完璧なまでの美を初めて見て、俺達

や、特に多感なアレックがどれほど胸を高鳴らせたか、分かるかい?

「友達になりたいなあ」

と、アレックは、ロバートに初めて会った日の帰り道で言っていた。俺もジェームズもゴードンも同じ気持ちだった。ロバートと仲良くしたい。でも、彼は金持ちの子だし、それに大変な美人だ。俺達が相手にされるのだろうか?　胸が躍る反面、そんな悩みが下校する俺達に付きまとった。

ところがな、笑ってしまうことに、それほど心配することでもなかったようだ。一週間が経つ頃には、育ちがよく美しいロバート・クロスは、遥かくだらない思い出の彼方に消え去ることになったのだ。

男子校の美少年といえば、俺は、十四の時、ブラック

コーヒーと共に大人ぶって読んだトーマス・マンの小説に出てくるような、うっそり儂げで、大人や上級生を手玉に取り、子供っぽい下級生や同級生を一人冷ややかに見つめる窓辺の人を想像していた。そしてロバートもまたそうだった。しかし、もう少し長く見てみると人間というものには分からんもので、ロバート・クロスという人間は本当に、儂げでも、冷ややかでも、高尚でもないことが一週間経つと分かるようになった。

彼は下品で粗野でやんちゃ、そして素晴らしいまでのクソガキだった。宿題はやってこない、遅刻はしょっちゅうする、当番日を忘れず、調子に乗って階段を五段飛ばしで駆け下りて、見事に足を踏み外し顔を鼻血まみれにする。あれのどろろが、儂げなもんか。

ロバートは次第に、「美しく類まれな高嶺の花」から「看護室と生徒指導室常習犯」へ降格していった。そしてその頃には、俺達とロバートの間の溝はすっかり埋まって

いた。

「な―あ、アレック。今日の宿題やってきた？」

ロバートは午前の授業が始まる前に、アレックか俺かジェームズかゴードンの机にやって来て、呼ぶ名前を変えながらよくこう言った。この文句が彼にとつての「おはよう」だった。

「まさかまた忘れたの？ お前さあ、ちよつとは自分でやって来る努力しろよな」

「数学と歴史はやって来たんですよ、アレちゃん。でもさあ、詩を作って来いって言われたやつあつたじゃん？ あれだけは無理。俺、ロマンを書く才能ないから詩作なんて出来ねえよ」

「俺の、ちよつとだけ見る？」

これは、いつかの朝の、二人の会話。アレックは迷惑そうな、それでも嬉しさを隠し切れない顔で言い、ノートを渡す。ロバートはノートを二分間じつと見つめた後、盛りの花も負けるほどの素晴らしい笑顔、擦り傷だらけの顔に浮かべた。

「すごいなあ。こんなきれいな詩が書けるなんて。アレックはきつと、神様が特別に作ったんだろうなあ」

それを聞いたアレックが、無言で下を向いて顔を耳まで赤くした。不思議な光景だった。アレックは子供っぽい人だ。だから謙遜というものを知らない。褒められたら彼は、白い歯を見せて「だろー？」と言うのが普通だった。こんな風に、小娘のように赤くなって黙るなんてことは、今まで一度だってなかった。

八年生が終わる頃には、ロバートはすっかり俺達の仲間入りをしていた。未知の存在だったロバートのことも、

その頃には色々理解していたし、どのような受け答えを、どのような時にするかも分かるようになっていた。

例えば、彼は自分のことを殊更に卑しく仕立て上げ、金持ちに思われるのを嫌がった。

「そんなまさか！ 俺はそんな大した身分じゃありませんよ！」

家柄を褒められると、彼は必ずこう言った。

「だって俺のじいちゃん、昔は町工場の工場長やってただけなんだけ！ それが何かの間違いでこうなっちゃってさ！ 要するに俺の家は成金ですよ、成金！」

そして彼は、この年頃の少年にはありがちの、両親への批判も必ず行うようにしていた。

「親父もお袋も、俺にやすつかり愛想つかしてるよ。次期社長としての自覚が足りんとさ。ふん！ 誰が好き好んで社長になんかなるかよ！ 俺は商売するより、文章を書く方が好きなのに、勝手に決めやがってクソジジイ！ お袋もつままない人間だよ。昔はよく台所に立ってお菓子とか作ってくれたんだけど、ばあちゃんが厳しい人でさ。台所に立つのは身分が低くて、下品な女だけだつて言つて、料理させないようにしちまった。それからお袋はずつと退屈凌ぎに一生懸命だよ。母さんが作るアップルパイ、大好きだったのになあ」

ロバートはこんな風に、一年間ずつといかに自分が平凡な人間か分からせることに精を出していた。裕福な家庭の子なのに、私立学校に行かなかったのも、「公立じゃなきゃ嫌だ！ 俺は普通の子になりたいんだ！」と父親に我儘を言ったかららしい。そんなロバートの努力も実つて、俺達は最早、彼を良家の子息だとは思わなくなつていた。

親の目を盗んで、こっそり吸った煙草、月に一度のお

泊り会、猛暑の中のアイスクリーム。そんな思い出の中にロバートは加わり、残り僅かな青春を共に過ごした。そしてその辺りからだろうか。アレックの書く詩に、官能が加わり始めたのは。

そんな微細な変化に気づいたのは、アレックが詩作をする様子が変わったからだだった。昔から所構わず詩を書き、友達に覗き見られてもへっちゃらそうだったアレックが、このところ友達の影響が近づくのを感じると、恥ずかしがってノートの上に覆い被さるようになった。俺やジェームズやゴードンは当然不思議に思ったが、ある時、教室で、夢中で鉛筆を動かすアレックの不意を突いてノートを覗き見た時、ふつと答えが分かった。

金髪と青い瞳への賛美が、紙の上いっぱい並んでいた。それもいつもとは違う「美しい」の言い方で。俺は三秒ほどしかノートの中を見なかったが、その「美しい」をちらりと目にした時、妙に心臓が高鳴つたのを覚えていた。あんな「美しい」は知らなかった。いつもの嫺やかで形に収まった「美しい」ではなく、灼熱に燃え上がる炎の川が流れ落ちていくような、激しさの詰まったあの「美しい」。それでも、暗がり、友達とグラグラ笑いながら回し読む春本のようないやらしさをなく、熱い言葉の端々に、また少年の震えが残されているあのアレックの詩。

俺はそつとアレックから離れて、教室の窓のそばまで移動した。その時、「パーシー」と聞き慣れた声俺を呼んだ。見るとロバートが、「どっちが好き？」と言いながら女優の写真を二枚持って、俺の方へ近寄って来た。金髪と青い目が、奇妙に鮮やかに、瞳に映った。

ある午後の授業でのことだ。国語の教師がシェイクスピアの十四行詩を教えていた。俺は眠いのと、先日見たアレックの官能的な詩がなんとなく胸に引っかかるのとで、ついついぼうつとしてしまつて、教師の話など少しも聞いていなかった。

「じゃあ、これから指名する人にこの詩を朗読してもらおう」

教師がそう言い、こちらをちらりと見たので、俺は慌てて居住まいを正した。この教師は、自分が満足のいく朗読が出来るまで、生徒を何十分も立たせたままにするこゝとで有名なのだ。しかし、不幸中の幸いか、この厄介な指名を食らつたのは隣の席の、朗読の得意なアレックだった。

「バルダーソン。ソネットの十八番を頼むよ」

アレックが静かに立ち上がり本を胸の前に構えた。その時、彼の両の瞳が、前方の席に座るロバートの方向へ向くのを、俺は見逃さなかった。

「例えるなら君は、真夏の日々だろうか」

アレックの声が甘く響いた。

「いや、まさか。君は遥かに美しく、穏やかだというのに。五月のいじらしい蕾は荒々しい風に散らされてしまふし、夏など呆気なく去つて行つてしまふもの。天空の瞳は時にあまりにも暑い輝きを放つのに、また時には黄金の面を雲の下にしてしまふ。いかなる美も、いつかは美しさを返すのが宿命。偶然か、自然の命令によるかの違いはあつても」

アレックは顔を下ろし、細めた瞳でロバートの項をじつと見つめた。太陽の色に染まつた、思わず手を伸ばしてしまふあの項。

「それでも、君の夏は永久のもの。君の美も、また永久

に君のもの。死神が、その陰で彷徨つて、『さあ、いつかはこの中に』と囁くこともあるまいさ。君は僕の詩と一つに溶け合い、永遠になるのだから。人が呼吸するその限り、その目が見えるその限り、この詩は生きる。君に命を与え続けて」

その時、俺は分かった。ようやくアレックの心を理解した。

（ああ、そうか。そういうことだったんだ）

机の上で顔を両手で覆つた。教師がアレックを褒め、つまらない授業を再開した後も、体中の血が激しく脈打つた。全身が小刻みに震えた。

（だからあんな風に書いたんだ。だからあんな風に美しく思えるようになったんだ）

しよつちゆう居眠りをして教師に鞭を食らうクソガキのロバートが、あの日から妙に美しく見えた。もちろん、初めて会つた時から十分綺麗ではあつたけど、アイツがアレックと一緒にいる時、そんな時だけやたらとキラキラ光り輝いて見えたんだ。

アレックの気持ちに気づいてしまつたあの国語の授業以来、俺はずつと頬を桜色にして、収まらない胸の動悸と共に過ごした。まるでアレックの思いが移つたかのよう、俺は二人の少年の間柄を、胸を焦がして思い続けた。

とは言つても、俺は普段はそんな素振りは見せまいとした。ジエームズやゴードンにもこのことは打ち明けなかつたし、アレック本人にも悟られないようにした。ロバートに向けたアレックの思いは、静かに、胸の内で温められている方がいいと思つたんだ。だから普段の俺は、

四人の友人と泥んこになつて遊び、咽こみながら煙草を吸い、女優の写真を見て彼女の着のサイズを言い合つたりして、いつも通りの「笑いのツボの浅い、お調子者パーシー・スタンプス」を保ち続けた。アレックもまた、

「子供っぽいロマンチスト」で居続けた。川の中でロバートが、太陽が知らない部分までさらけ出して泳ぐ時も、彼が粘り気のあるアイスクリームを舌で舐めとる時も、彼は熱い眼差しを二重瞼の中に収め、子供らしいボディタッチを難なくこなした。それでも彼が、ロバートの一片を手の平に感じる時、どれだけ血管が脈打つたことか、俺には痛いほど分かつた。

十四歳が終わり、十五歳を過ぎ、十六歳を通り、やがて俺達は十七歳になった。この三年間を、俺達五人はふざけあい、楽しく不真面目に過ごした。ほんの少し、何か大事件が起こつたりしないかなと思つたりはしたけれど、それ以外は本当に胸の躍る日々だったよ。

大人になるに連れ、アレックのロバートへの詩は、次第に唇から漏れ出すようになった。よく二人は教室の隅で向かい合わせに座り、ロバートは陽気なふざけた顔を、アレックは陽気さの中に緊張を隠した顔を互いに向き合せていた。

「君の肌は夕暮れの空みたいな蔷薇色で……」

アレックがいつかの、甘い声で言つていた。

「イマームのモスクのタイルより鮮やかな青い目を持っていて……角度によって少し違つた色に変化する金髪で、笑うと頬が窪んで、煙草を持った時の指の関節がすごく上品で……」

「嬉しいこと言つてくれるじゃん、アレック」

ロバートが腕相撲をする時のように、机の上に肘をついてアレックの手を握る。

「君は人を笑顔に出来る才能があるんだなあ。君の言葉には誰だつてうっとりしちゃうんだもの」

アレックの秘められた思いが、ぱつちりと大きい二重の瞳からじわりと漏れ出ていた。

サラエボ事件が起こったのは、俺が十七の時、六月と七月の狭間だった。新聞売りのバイトをしていたアレックが、あの日は特別に大忙しだった。

ジェームズ、ゴードン、ゴードンの弟と一緒に公園へ行き、アレックが死守した最後の一部を読んだ時、俺やみんなは訳もなく興奮した。

「王族が暗殺されるなんてすつげえなあ！ 教科書で見えたことないもん！」

ゴードンが、普段はのんびり優しい顔を真っ赤にして言っていた。俺達は、皇太子夫妻を手にかけてセルビア人青年、ガブリロ・プリンツィプに一抹の敬意を抱いた。ハプスブルク家という格式高い王朝に立ち向かったこの十九歳の青年は、さんざん民主主義精神の気高さを教え込まれた俺達にとつて英雄に思えたんだ。学校生活ではいたって不真面目な俺達だが、やはり世界や国家の行く末には興味を惹かれていたのだ。それに何しろ、戦争まであと一歩だという世界情勢が、年若い俺達に、少なからず興奮を与えていた。だから後からやって来て、思想や正義のことなんて気にもかけず、「期末試験よりこんな方々の死のほうが大切なのか」と呑気に言うロバートがあまりにも滑稽で子供っぽく思えて、俺は笑いながらこう言った。

「馬鹿だ！ この人は！」

今思い返せば、事件にあれほどワクワクしながらも、誰も殺された皇太子夫妻を憐れむ言葉は出さなかった。ただ一人、あの日、たまたま一緒にいたゴードンの、十歳の弟だけが、「オーストリアハンガリーの皇帝様はかわいそうにね」と口にしていた。あの子は、兄に負けないくらい心の優しい、大人びた子だった。

サラエボ事件から一週間が経つころには、俺達はすっかり興奮も冷めていた。まあ、いくらこの大事件にワクワクしたとは言っても、これが後の第一次世界大戦に繋がるとはさすがに思わなかったから、正直時間が経つとどうでもよくなってしまったんだ。後はただ、暑い日々をアイスクリームと自転車と共に過ごした。

しかし、オーストリアハンガリーが宣戦布告し、対戦が始まったのは、あの事件からたった二か月後だった。それを知った時はびっくりしたよ。事件が過ぎてぼんやりしていた頭が、ぱつと晴れ渡ったかのようだった。生まれて初めて突き付けられた戦争に、俺達はサラエボ事件以上の興奮を覚えたものだ。あの時知っていたのは、心に思い浮かべたものは、広大な荒野、翻る軍旗、大地を蹴る駿馬、そして蛮族を突き刺す長剣。男なら一度は夢に見た、あの光景が目の前に広がっていた。

それでもな、アレックは分かっていた。アメリカは中立国で参戦する意志も、理由もないってことを。やがて俺達もそれに気づいて、興奮はすっかり冷却されてしまった。ただロバートを除いては。

あの宣戦布告の日から彼は変わりだした。次第に俺達と遊ぶ回数が減っていき、ひたすら勉強に打ち込むよう

になった。あれだけ最低なテストの点数を見せびらかしていたロバートが、学年トップの成績を取り始め、一週間に一度は言っていた両親への愚痴もいつしか口にしなくなった。

「親父に参戦国に鉄鋼を輸出したらどうかって言ったんだ。で、俺の案が採用されたから、俺も親父の仕事を手伝ってんのさ」

俺が聞いてみると、ロバートはけろりとうろ言った。俺達とふざけあっていた頃よりも生き生きとした顔を見て、俺は誰よりも上手いこと戦争に参加できたロバートを、少し羨ましく感じた。

「なんだかアイツ、変わっちゃったなあ」

ゴードンがロバートのいない間に寂しそうにポツリと言った。アレックはそれを聞いて少し怒ったような顔を、ゴードンに向けた。

「そんな風に言うなよ、ゴードン。本当は俺達だってロバートを見習って変わらなきゃいけないんだ。たとえ参戦はできなくても彼みたいに意識を変えなきゃ」

「そりやそうだけどもさ」

ゴードンが不満そうに唇を尖らせた。

「アレックってロバートには何か甘いよな」

それを聞いたアレックが途端に赤くなった。

「クリスマスまでには終わる」と謳われた戦争は、一九一五年も一九一六年も通り抜けていった。その頃には俺達の愛読書は春本ではなく新聞になっていて、悪ぶった遊びの代わりに、紙から送られる戦地の様子に夢中になった。ルシタニア号がドイツ軍に沈められ、百一十八人のアメリカ人が死んだ時も、俺達はみんな揃って怒り

狂い、ロバートなど自分で雇ったドイツ移民をクビにしたほどだった。あの時の若い連中が皆でうだつたように、俺もアレックもロバートも次第にドイツへの憎悪を募らせ、益々参戦を心待ちにした。

「もし参戦が決まったら、みんなで戦地に行こう」

アレックがそう言い、俺達はみんなで約束しあった。

「いざという時、大事な人をすぐそばで守れるようにさ。そのために強くなるう。みんなで」

あの夢見る少年の瞳で、アレックは言った。真つ直ぐロバートだけを見つめて。

アレックの、ロバートへの一方通行な思いは、ある昼下がりの教室でほんの少しだけ遂げられることとなった。俺はその瞬間を扉の影で覗き見たんだ。

ある日の放課後、俺とジェームズとゴードンは校庭でサッカーに興じていた。アレックとロバートは教室に残って自習すると言つて来なかった。

しばらくは楽しく遊んでいたのだが、三人でやるサッカーなど蹴りあいつこが限界で、一時間もすれば飽きてくる。やがてジェームズが「もうそろそろ帰ろう」と言い出し、俺とゴードンは賛成した。ジェームズとゴードンがボールやらを片付ける間、俺は自習している二人を呼びに教室へ向かった。

教室の扉が開いていてよかった、と俺は今でも思う。もし閉まっていたら、あの何にも例え難い瞬間をぶち壊しにしただろうから。

二人は隣り合つて、机に向かって座っていた。そこまではいい。しかし、俺を扉の影に立たせたままにしたのは、二人のその体勢だった。ロバートは眠っていた。ア

レックの右肩にもたれかかつて。

俺の心臓は訳も分からず高鳴つた。今までしてきたような身体の触れ合いとは違う、もつと緊張を孕んだ魅惑的な香りが、二人の数センチない隙間に漂っていた。

ふと、アレックが眠るロバートの顎を掬い上げるように持ち上げた。細い顎の線が白く光り、斜めに日光を受けた唇が煌めいた。俺の心臓はもう、気管を上り詰め、口からポロリと落ちこちんばかりに脈打つた。

ロバートの顎と唇が、アレックの黒い髪影に覆われて見えなくなった。すうすうと規則正しく聞こえていた寝息が、三秒間だけ停止した。やがてアレックの顔が離れ、ロバートの頭は再び彼の右肩に収まった。

その時、背後から足早な靴音と元気のいい声が聞こえた。振り向くとジェームズとゴードンが「遅えよ、パーシー！」と叫びながら走り寄つて来た。二人はそのまま俺を押しつけてスズカと教室の中へ入つていった。

「なんだ、寝てんのかよ、ロバート！」

眠い眠いと愚図るロバートを叩き起こして、俺達五人は帰路に着いた。ジェームズとゴードンは頻りにロバートを「お眠のロビーちゃん！」とからかい、俺も便乗して笑つたが、アレックは一人離れたところを歩いていた。「はいはい！ どうせ俺はロビー坊やでちゅよう！」と言つてふざけるロバートを口でからかいながら、俺はそつとアレックの方を振り向いた。

アレックは微笑していた。下を向いて、先ほどロバートにやった唇に指を添えて、細めた目の端にうつすら涙を浮かべて。そしてあまりに幸福そうな笑顔を湛えて。

あんなに美しい笑い方を見たのは、今までの中でも、あの時を除けばほんの僅かだった。あれからも何十年も経つが、俺は今でもアレックをあつ笑顔で思い出す。

アイツの戦地での顔も、死体になつた時の顔も、一切打ち消すようなあの笑顔が、何十年経つても忘れられない。そしてそんな笑顔を見た時、十七だった俺は思ったんだ。アレックとロバート。この綺麗な二人の少年の、幸せな戯れあいを、ずっと見ていたい。この二人の美しい友情を守りたい。あの時の俺にとつてあの二人の中に、幸福も平和もあつた。そしてそれは、民主主義精神やリベラリズムなんかよりも尊くて、守り抜かねばならないものに思えたんだ。そしてもし、戦争が、敵が、この二人の世界にヒビを入れるなら、俺は銃を取ることも怖くない。そう思った。

「つまりはさ」

パーシー老人の話を黙つて聞いていたレイが、そつと口を挟んだ。

「アレックはじいちゃんを愛してたつてこと？」

老人は「もつと食え」とばかりにクッキーの缶をアレックの方へ押し出しながら答えた。

「さあ、どうだろうな」

「は？ 何で分かんないのさ。アレックはじいちゃんのこと好きだったんだろ？」

「それは確かにそうだが」

「じゃ、愛してたつてことじゃねえの？」

パーシー老人は不愛想な顔にほんの少し困つたような笑みを浮かべて、レイの頬に付いていたクッキーの欠片をそつと指でつまみ取つた。

「お前は若いな。いいかレイ。あの二人の関係はな、愛と名付けられるほど重々しいものじゃなかった。もつと軽くて、明るくて、心弾むものだったよ。だからこそ、

俺だって楽しく感じられた。いつまでもあの二人を見ていたって思ってたんだよ」

「あの二人、あの二人っていうけど……」

レイは乱暴に頬を袖で拭いながら言った。

「じいちゃんはアレックのことどう思ってたのさ。二人は結局恋人同士になったりしたの？ アレックはじいちゃんに思いを伝えたりした？」

パーシー老人の顔から笑みが引いた。代わりに重苦しい色が黴だらけの顔に浮かんだ。

「アレックは何度もロバートに思いを訴えていたよ。でもそのやり方がとても遠回しで伝わりにくいものでな。アイツは詩を囁くんだ。ロバートの耳元で。それもすごく短くて、異国の言葉で歌う詩をな」

そう言うときパーシー老人は、唇から不思議な言葉を一息で発した。

「オキモセズ ネモセデヨルヲ アカシテハ ハルノモノトテ ナガメクラシツ」

「それ、日本語の和歌だね」

レイが、目を見開いて言った。

「起きもせず 寝もせで夜を 明かしては 春のものとて ながめ暮らしつ。昨夜は起きも眠りもしないで、ずっとあなたのことを考えていましたって意味だよ。在原業平って人が詠んだ歌なんだ」

「お前、よく知ってるんだな」

パーシー老人が驚いた表情を浮かべた。そしてその後再び、皺の濃い重苦しい顔を取り戻した。

「だが、あの時のロバートには伝わらなかったよ。俺はお前のように、詩の意味までは知らなかったが、それが恋の詩だってことは何となくわかった。だがロバートにはそれすら勘づくことは出来なかったんだよ。アイツは

そのアリワラの詩を、呪文か何かだと思つて笑つた。それでもアレックは事あるごとに、何度もその詩を口ずさんだ。昼食前の祈りの後、帰り道、川辺で泳ぐ時。アレックはその不思議な響きの詩を唇に乗せて詠んだ。自然に、俺が覚えてしまうほど何度も」

あの二人の無邪気な関係を、ずっと守りたいと思つた俺だが、同時にアレックの思いは絶対に実らないということも知っていた。ロバートは、アレックを友人からその上の存在として見たりはしない。そしてそれは、これからだつてずっとそうなのだ。

俺は一人悩んだ。アレックとロバートはどうしたつて恋人同士にはなれない。そればかりか、もしアレックの思いが世間にバレたりなどしたら。男が男に恋するなどご法度の時代だ。そんなことが露見すれば、アレックは一生を精神病棟で終えることになってしまう。

俺はアレックが傷つき、苦悩に陥っていく様を想像して震えた。彼はずっと苦悩とは無縁の明るい少年で、同性に恋する苦しみなども、彼からは感じ取れなかった。もちろん、大っぴらに宣言しない分多少なりともリスクは感じていたのだろうし、それなりに葛藤もあつただろうが、オスカー・ワイルドやアラン・チューリングのよう激しい苦しみとは少し違うような気がした。彼のロバートへの思いは、少年が少女に恋するような月並みなものに、人前では愛を囁けないという少しばかりの不満が付いただけの、あくまでも無邪気で明るいものだった。そんな無邪気な恋が打ち破られれば、きつとアレックは本当の苦しみを知ることになる。そしてロバートも、自分が答えなかつたせいで友達を苦しめたと知れば、きつ

と思いつめるだろう。あの明るい二人が、そんなことで苦悩するのは嫌だった。

世間から非難されず、アレックが苦悩することもない方法は何かないだろうか。そう考えていた時、俺はふとエリザベス……みんなからはシシーと呼ばれていた従姉のことを思い出した。彼女は金髪に青い目を持つ、一つ年上の娘で、大層な美人という訳ではないが、気さくなのと話がよく分かるのとで異性からは人気があつたし、哲学書や新聞を読むのが好きで、女の割には頭が良かった。そして何より、笑つた時のいたずらっぽい顔が、ロバートによく似ていた。俺は、彼女ならいいのではないかと思ひ、さっそくシシーに手紙を書いた。

シシーは、俺が郵送したアレックの写真を一目見るなり彼のことが気に入つたようだった。ロバートのような美人ではないが、アレックもなかなか容姿のいい青年なのだ。

俺はシシーの了解を得ると、さっそく彼女をアレックに引き合わせた。「女の子を紹介する」と言われ、アレックはあまり乗り気ではない顔で待ち合わせ場所の喫茶店にやって来たが、シシーのいたずらっぽい笑顔を一目見るなり、その顔を覆っていた霧がぱつと晴れた。

「君は……」

俺が二人を交互に紹介すると、さっそくアレックはシシーの手を取って熱っぽく言った。

「君は俺に愛してるって言えるんだね？ カフェのテラス席でキスすることも出来るんだね？ ご両親や友達に俺を紹介することも出来るんだね？」

「もちろんよ、アレック」

シシーは身を乗り出して向かいのアレックの口唇に接吻した。彼女は、この当時の慎ましい女なら絶対にしな

いようなことを、平気でやつてのける先進的な娘だった。「私の恋人があなただとして、一体何を恥じることがあつて？ お互い好きだつて気持ちがあれば、それで十分じゃないの」

それから、シシーとアレックは、よく二人連れ立って町を歩いた。アレックの指は、いつもシシーの複雑に結い上げられた髪の上に置かれていた。シシーという時のアレックは本当に幸せそうだった。ロバートには出来なかつた、意味のこもつた身体の触れ合いを人前で出来る、そんなささやかな幸せを、シシーはアレックにもたらしただの。そんな二人を見て、ロバートはよく「いいなあ、アレックの幸せ者め！ 俺も彼女欲しいよ、全く！」と言つていた。

アレックとシシーのカップルは、アレックとロバートの時と変わらず、無邪気で明るく美しかった。二人が手をつないで歩く度、接吻を交わす時、愛の詩を贈りあう時、アレックは二増明るくなり、俺も同じように嬉しかつた。

「彼と知り合えてよかつたわ、パーシー」
彼女はよく俺にこう言つた。

「あんなに情熱的な人だなんて思わなかつた。まるでずっと前から用意してあつたように、甘い詩を次々と口にするのよ」

「え、ちよつと待つて……え？ どういうこと？」

レイは目を丸くしてパーシーを見つめた。

「だつてシシー……エリザベス……」

「レイ。まあ、とにかく落ち着いて聞いてくれ」

パーシーに肩を叩かれ、レイは丸くなつていた目を二

三度閉じ、首をブルブルと振つた。「分かつた。とにかく分かつたよ」
椅子の上で、背筋を伸ばして向かいのパーシーをじつと見た。

「それで？ パーシーさん」
「なんだ？」

「あんたはシシーとアレックを恋人同士にしたんだね？」

「ああ、そうだ」

「どうして、そんなことを？」

「さつき。言わなかつたか？」

レイは唇を引き結んでパーシーを見つめた。しばらく、沈黙が向かい合う二人を、重く包み込んだ。やがて、その静けさが、レイが椅子を引く音で破られた。

「パーシーさん、もう、終わりにしよう。もうそろそろ飯の時間だし、俺、ばあちゃんを手伝いにいかない……」

「……」

「レイ」
パーシーの声が、後ろを向こうとするレイを止めた。

「聞かせると言つたのはお前だ。聞くん。このまま知らんぷりはさせないぞ、ロバート」

レイはしばらく、自分の胸より下の位置にいるパーシーを見下ろした。ふと、レイはなんだか随分パーシーが若く見えるように感じた。皺だらけの顔の中の両の瞳が、青年のそれだった。

椅子に座れば、目線がぐつと低くなり、年若いパーシーの瞳を真つ直ぐ見つめることが出来た。

一九一七年がやつて来た頃に、俺達は二十歳へと近づいていた。その頃には、ロバートの会社は鉄鋼の輸出で

多大な利益を出しており、ロバートはそれはもう毎日ほくほくしていたよ。

「戦争つてのはいいなあ。俺にすごいチャンスくれたよ。父さんとの関係を良好にするチャンスも、もつと稼ぐチャンスも、真面目に生きるチャンスもね」
ロバートはいつも言つていた。

そして四月二日。あの日に参戦教書が発表された。どんなに嬉しかったことか！ 俺達は、いつもの公園で新聞を読んで、大はしゃぎしたよ。

（戦争へ行けるんだ！）

そう思うと、自然に足がタツプするほど心が躍つた。（銃を持つて戦うんだ！）そして大切な人を、美しいものを敵から守るんだ！ 絶対に壊したくないものを守るために、俺は戦地に行くんだ！！

アレックもまた大喜びで、いきなりロバートを引き寄せて額にキスし、俺を一瞬ヒヤつとさせたほどだった。

俺達は公園で一頻りはしゃぎ回つた後、このまま家に帰る気にはなれず、頬を紅潮させたまま、しばらく町を練り歩いた。町中が、俺達と同じように浮足立っていた。そして途中で、俺達は写真館に立ち寄り、小遣いを出し合つて記念写真を一枚撮つた。ほら、みんないい顔をしてるだろう？ 希望を信じて疑わない、キラキラ輝く瞳

写真館を出ると、ようやく俺達は帰る気になつて家へ向かつて歩き出した。途中でロバートが抜け、やがてジエームズとゴードンも違う角を曲がつていき、俺はアレックと二人きりになった。しばらく他愛もない話などしながら歩いていたら、自宅まであと少しといつとところで、アレックが突然重たい声で言つた。

「なあ、パーシー。俺がなんであんなにも兵士になりたがつてたか分かる？」

「モテるため？」

俺はふざけて答えた。もちろん、そうじゃないことは十分わかってる。

「違つよ、パーシー」

アレックが首を振った。

「確かに中には女にモテたいから、かつこよく見られたいからって理由で兵士に憧れるヤツもいるだろうさ。でも俺はそうじゃない。俺はな、パーシー。ロボットのために兵士になるんだ。あの人が兵士になるんだったら、一番近くであの人を守りたい。あの人が国に残るんだったら、あの人を暮らす場所を守りたい。そりや、敵国の連中は嫌いだし、祖国のために戦いたいつて気持ちもあるさ。だけど、その祖国もロボットが暮らす国だから守りたいと思うし、敵もそのロボットを脅かすから憎いと思うんだ。分かるだろ、パーシー。俺の心の全てはロボットなんだ。十四歳の時初めて彼に会つてからずっと」

俺は無言で頷いた。今更何も驚かない。するとアレックの腕が伸びて、俺の肩を優しく掴んだ。

「パーシー。お前はずっと俺の気持ち、わかつてくれたんだよな。だからこそ、色々と気を使つて、黙つてくれたんだよな。パーシーを紹介してくれたのも、そうだよな。お前つていいやつだよ。ありがとうな、パーシー。それからパーシーも。彼女は本当に素敵な人だよ。キスしたり、手をつないだりすると、すぐドキドキして、幸せな気持ちになるんだ。もうずっと、胸に描いていたことが、本当になったみたいで」

五月に、カンザスの訓練場に送られる兵士が抽選で決定された。新聞の一览に俺とアレック、ジェームズ、ゴードンの名前が載り、俺達は抱き合つて喜んだ。しかし、ロボットだけは落選した。俺達は五人揃つて兵士になれ

ないことを悔しがったが、しかし当のロボットはけろりとして言つてのけた。

「まあ、しょうがないさ。前線には出れなくても、商売でお前らをサポートすることは出来るからさ。俺はそれで十分だよ。だからさ、お前も頑張れよ！ 最高に強い武器いっぱい作るからさ！」

それからすぐに、汽車でカンザスへ向かつた俺達は、上官の元で訓練を始めることとなった。列車を降り、すぐさま基地の宿舍へと向かつた俺達や、その他の年若い青年達は、汗の香りが漂う二段ベッドや、その上に置かれた新品の軍服に胸をときめかせた。

「しばらくロボットやパーシーに会えなくなるなあ」

軍服に着替えながらアレックは呟いた。それでも、その顔に寂しそうな色はなく、どこか生き生きとした凛々しい表情が浮かんでいた。隣できやあきやあとはしゃぐジェームズとゴードンを尻目に、俺も肌に新しい軍服のチクチクとした感触を楽しんだ。

やがて運動場で実践訓練が始まったが、これが思いの外キツかった。俺もみんなも、体育の成績は上位の方だったし体力にも申し分なく自信があつたのだが、あの訓練はそんな年若いプライドを見事にほきりとへし折るほど、辛いものだった。何時間にも渡る行進や、歩け歩け止まれ匍匐前進。そんな地獄のような練習の後は、太腿がギリギリと引き攣るように痛み、夜も眠れないほどだった。それに加え毎日、教官の熊の吠え声のような叱責と拳が頭に飛んでくるんだ。同室の仲間の中には、「もう帰りたい」と泣き言を言う者まで現れ始めた。

しかしアレックは違つた。彼はどんなに長く厳しい訓練の間でも、どんなに胸糞の悪い教官の怒声を浴びても、弱音一つ吐かず生き生きとした顔を崩さなかつた。どんな厳しさにも泥だらけで耐える彼の姿は、心の砕けそうな俺達に自ずと希望を与えたものだ。そして時にアレックは、寝室で疲れ切つた仲間達を励ますこともあつた。

「辛い時は守りたい人のことを思い出すんだ、みんな！もし俺達が戦わなかつたら、その人が危なくなるんだぞ！ だからみんな、もう少し頑張ろう！ 訓練ぐらいで音を上上げてちや、戦地でやつてけないぜ！ ほら、もうこよくするのはやめてさ！ 愛する人のために強くなるんだ！」

彼の励ましは大統領やお偉い方々が口にするものよりもずっと効果があつた。彼の元気な声を聞くと、不思議に疲れも和らぎ、「明日もまた頑張ろう」と思えるようになるんだ。

一週間が経ち、銃を使わせてもらえるようになると、あれほど苦しかった訓練が少し楽しくなつた。俺が人差し指を少し動かすだけで、熱を帯びた弾丸が気持ちのいい反動と共に飛び出、遠くの的をバラバラに砕いた。そんな時俺は、子供の頃憧れた西部のガンマンの気持ちを知つた。射撃はアレックが人一倍上手く、偏屈な鬼教官が思わず拍手をしまうほどだった。そして銃の腕を褒められる度、アレックが夜な夜な書く詩に激しくロマंचチックな言葉が増えた。

そしてとうとう訓練を終え、俺達に実戦へ赴くよう伝える通達が来た。行先はフランス。ランボーの故郷。

ニュージャージーの港で重々しい軍服を着、ラズベリーの汁を塗りたくったかのように赤い顔をした俺達を、ロバートが遠くから汽車に乗って見送りに来てくれた。俺達がカンザスで汗を流していた頃、ロバートは社交界で必死に働いていたらしい。久しぶりに会ったロバートからは、ビスケットと砂と安物煙草の香りの代わりに、香水とシャンパンの香りが立ち上っていた。長い間共にあったあのクソガキは、魅惑的な大人の微笑に隠れて見えなかった。

ロバートは俺達を順々に抱きしめ、最後はアレックと語らった。ロバートの前でアレックははしゃぎ、自慢し、小躍りし、まるでかつてのクソガキの体臭を、香水の香りの霧から連れ出そうとしているかのようにだった。

ロバートがポケットから出したビスケットやチョコレート、そつとアレックのポケットに移した。そして波止場から流れてく『オーヴァー・ゼア』がサビに差し掛かったところで、彼は突然アレックの両頬に接吻した。

俺はその様子を遠巻きに眺めた。アレックの頬に落ちたあの唇は、いつかの教室でのものと同じだっただろうか。そして、あの接吻には、フランスの風習以外の意味があつただろうか。そう思ったが、俺のすぐそばでジェームズが母親の頬にキスするのを、ゴードンが泣きじゃくる弟の額にキスするのを見て、あっさりと言えが出てしまった。

そんな思いに一人耽っていると、不意に後ろから肩を叩かれた。振り向くと、大きな帽子を被り、董色のスーツ型下レスを着たシシーが立っていた。きちんと化粧もして、いつもと比べてほんのちよっぴり綺麗だった。

「やあ、シシー。来てくれたんだね。アレックにはもう会った？」

「いいえ、まだよ。でも止すわ」

そう彼女は静かな声で答え、そつと遠くの二人を見つめた。アレックは丁度、ロバートの手を取って何やら呟いていた。少年の瞳のまままで。

「あの金髪の綺麗な人がロバートね？」

俺は彼女の問いかけを無視した。遠くのアレックが、腰から小ぶりの軍刀を引き抜き、ロバートのジャケットの袖を切り取っていた。俺はふと、歴史の授業で習った、中世の騎士の風習を思い出した。

しばらく、シシーと二人で彼らを見つめていた。辺り一面に燃え立つ人々の熱狂を冷やすように、涼しい潮風が吹いていた。隣からゴードンの声が聞こえてくる。

「ほーら、よしよしノア。泣くんじゃない。絶対帰って来るからさ。兄さんがいない間、お前が父さんと母さんを助けるんだぞ！約束できるか？ うん、よし、いい子だ！」

「パーシー」

突然名前を呼ばれた。ぼうつとしていた頭を横に振って隣を見ると、シシーが俺を見つめていた。

「生きるのよ、パーシー。何としてでも生きるのよ。生きてしつかり考えるのよ」

彼女の言葉に俺は、この女、俺が死に行くつもりとでも思っているのか？と、むつとしたが、ふと彼女がなかなか賢い娘だということを感じ出して、何とも言えない気持ちになった。とりあえず、笑顔を返事とした。

やがて出航の汽笛が鳴ったので、俺は慌ててシシーに別れのキスをし、「伯父さんと伯母さんよろしく」と言っ

てタラップに向かった。船の上から、右に左にちらちら揺れる無数の星条旗を眺めた。その中に、ロバートの姿があつた。シシーはい

つの間にかいなくなっていた。

「アレック！ パーシー！！ ジェームズ！ ゴードン！」

元気でな！ 帰って来いよ！ 絶対に帰って来いよ！」

そう叫ぶロバートの唇に、アレックは彼の袖を振って答えた。船がぐんぐん離れていき、港が掌ほどの大きさ

になってしまった。アレックは袖を振り続けていた。それを見て、俺はふと、いつぞやアレックが口ずさんでいた、あの異国の短い詩の一つを思い出した。

アカネサス ムラサキノイキ シメノイキ ノモリハ
ミズヤ キミガンデフル

船のスピードは汽車に乗っている時よりも遅く感じた。

最初はいつユーボートが現れるかと少しびくびくしていたが、のつたりのつたりと進む船は、戦地へ向かっているという緊張感を次第にじんわりと和らげていった。大西洋を渡る長旅の間、兵士達は若い熱を、甲板の上のレスリングや徒競走で発散させた。俺達も、しばらくはスポーツやトランプに興じてのんびりと過ごし、ジェームズが船酔いでしょつちゅう嘔吐するのを除けば、ぼちぼち平和な日々が続いた。

しかし、そんな退屈な平和も、しばらくするとじわりじわりと崩れていった。一人の兵士が熱を出した。その兵士と仲が良かった兵士も体調を崩した。彼の近くで寝ていた兵士達も、不気味な咳をするようになった。そして大勢の兵士達が高熱で倒れていった。今でいう所のインフルエンザ。そのパ

ンデミックがああ船で起こったのだ。

若く細身の兵士が、隔離部屋から遺体となって運び出されるのを見る度に、俺達は震えあがった。そして必死

で必死に働いていたらしい。久しぶりに会ったロバートからは、ビスケットと砂と安物煙草の香りの代わりに、香水とシャンパンの香りが立ち上っていた。長い間共にあったあのクソガキは、魅惑的な大人の微笑に隠れて見えなかった。

に出来るだけたくさんのお食事を摂り、隔離部屋に近寄らないようにした。好物の腸詰や乾酪が、あの時はひどく無機質な味に思えた。

しかし、どんなに気を付けていても、とうとう俺達の内一人が、気まぐれな病魔の手にかけられてしまった。ゴードンが熱で倒れたのだ。

すぐ様、隔離部屋に運び込まれたゴードンを、俺達三人はひどく心配した。あの食いしん坊のゴードンが、冷えた缶詰スープは愚か、水さえ受け付けなかったの思い出し、悲嘆に暮れた。そして、ゴードンを心配するのに加えて、病状が深刻な彼と長時間行動を共にしていた自分も、もしかしたら感染しているのではないか、という不安が付いて回った。

ゴードンが倒れた日の夜、三人で不安な気持ちを抱えながら甲板に座り込んだ。しばらく無言で座っていたが、やがてジェームズが一人、口を開いた。

「俺、ゴードンのところへ行ってくる」

俺とアレックは驚いて立ち上がった。

「何言ってるんだバカ！ そんなことして病気がうつったりしたらどうするんだよ！」

「構うもんか、そんなこと！」

ジェームズも大声を出して立ち上がった。

「だって今一番怖い思っているのはゴードンなんだぜ！だからこそ、そばにいてあげたいんだ！ そばで励ましてほしいんだ！ そのためだったら感染なんか怖くない！ アイツは大事な友達なんだ！ 友達が大事な時にそんなつまらないこと気にしてどうするんだよ！」

そう言い残し、ジェームズは駆けて行った。アレックはしばらく彼の後ろ姿を見つめていた。

ジェームズはあれからずっと、隔離部屋に入り浸っていた。ある日、たまたま部屋の前を通った時、彼の姿を見かけた。苦しうに呻くゴードンの枕元に彼は座り、ゴードンの額に浮く汗を濡れた布で拭いていた。口と鼻を布で覆い、手には厚い手袋を嵌め、しっかりと感染予防をしてみたが、瞳には暖かい慈しみの色が浮かんでいた。美しい瞳だった。俺が一度だつて見たことのない、アレックやロバートやシシーの中にも見つけられなかった、あの清らかな美しさ。そんな美しさを、あの病室でジェームズは纏っていた。

ある日、アレックと甲板を歩いていると、ジェームズに呼び止められた。振り返ると、彼はマスクも手袋も着けず、あの清らかな瞳だけで立っていた。彼の姿を見て、アレックがぎよつとした顔で、五歩後ろに下がった。暫くジェームズは立ち尽くしていたが、アレックを見るとゆっくりマスクと手袋を着け、話し出した。

「アレック。パーシー。どうしてゴードンの見舞いに来ないんだよ？ アイツ、お前らに会いたがってるぞ」

「だって……」

俺は口ごもった。正直に病気が怖いからとは言いつらかった。

「ごめん、ジェームズ」

そう言ったのは、アレックだった。

「俺はまだ戦場に出ていない。だからここで病気にかかって死ぬわけにはいかないんだ」

「はあ!! なんだよ、それ!!」

ジェームズが怒鳴った。

「大事な人のために命を懸けようって言ったのお前じゃねえか！ 今がその時だろうがよ！ 大事な友達が死にかかっているんだぞ!! ビビってんじゃねえよ、アレック!!」

「ジェームズ！ 俺が守りたいのはロバートなんだ！」

アレックが怒鳴り返した。二人の荒い呼吸がしばらく甲板の上に響いた。やがて、「なんだよ、それ」とジェームズが掠れた声で言った。

「ロバートが守りたい人？ じゃあ、俺やゴードンや、パーシーは？ お前にとって俺達は何なんだ？ 俺達のことはどうだつていいのか？ 死んでも構わないのか？」

「……」

「ロバートのことが好きなのか？ だとしたら、お前なんで……なんでシシーと恋人同士になったりしたんだよ？」

アレックは何も答えなかった。ただ下を向き、今までみたことのないほど青ざめた顔に汗を浮かべていた。俺は恐る恐るジェームズを見た。彼も黙っていた。怒りを通り越した、どこか超越的で冷ややかな顔をして。

俺は次第に怖くなった。目の前のジェームズが、小さいころからずっと一緒に遊んできたジェームズが、一体何を考えているのか分からなくなった。俺達一人とジェームズの間、とてつもないほど高い段差が出来たように感じた。

やがて、ジェームズは「分かった」と一言言い、去っていった。あのやんちゃな彼からは想像も出来ないほど、落ち着いた大人らしい声で。

あの日から、ジェームズとアレックの間には目に見え

ない壁が出来てしまったようだ。アレックは結局一度もゴードンの元へは来なかった。大して俺は、あれほどのジェームズの説得を間近にしながら見舞いをしないのは何となく気が引けて、勇気を奮い立たせてゴードンのいる隔離部屋へ向かった。

ジェームズは、俺を見ると、いつも通りの笑顔を向けた。俺も彼に微笑み返し、案外、俺の他にも見舞いに来た人がたくさんいることに少しほっとした。

ゴードンは、ジェームズの腕に支えられて何とか半身を布団から起こし、汗まみれの青い顔に弱い笑みを浮かべた。

「よう、パーシー。来てくれて嬉しいよ。そんな心配するな顔するなって！　すぐよくなるからさ。そんでちやつちやと国に帰って、またみんなでサッカーしようぜ」
そう掠れた声で話すゴードンを、ジェームズは優しい目で見つめた。澄み切った慈しみのこもったあの美しい目で。

もはや回復する見込みはないと見えたゴードンだが、しかし不思議なことに、日を追うごとにぐんぐんと高くなっていった熱がある日突然急激に下がり、おまけに食欲までだんだんと戻っていったのだ。やがて彼は、水をふんだんに飲み、固形物も口に出来るようになった。つやつやと血色のいい顔をして、黒パンとミルクを次々と平らげるゴードンの横で、ジェームズは涙していた。

「よかった！　ああ、本当によかった……！」
と何度も言いながら。

人が嬉しさのあまり涙するという光景をみるのは二度目だった。しかしジェームズの涙は、あの時のアレック

の涙よりも透き通っている気がした。彼が抱えている欲が、どれほど清纯であるか、その涙が示していた。アレックとロボートのように激しく胸打たれるものではなかったが、何とも名の付けようもない暖かく優しい雰囲気、ジェームズとゴードンは手にしていた。

ゴードンが回復したその夜、俺とアレックは隣り合っ

て横になっていた。俺は家から持ってきた本を寝転がって読み、アレックはカンテラの弱い光の中、枕の上に置いた紙に、鉛筆でさかんに文字を書いていた。

「ゴードン、よくなったみたいだぜ」

俺は、呼んでいた本を胸の上に置いて、隣のアレックに言った。アレックの返答の代わりに、鉛筆のカリカリという音だけが耳に届いた。俺は腕を枕の上に置き、ぐいっと上半身を起こすとアレックに向かって、「なあ」とはつきり喋りかけた。

「お前、ロボートに菓子もらっただろ？　あれ、ゴードンにあげてもいい？」

「ごめん」

アレックが静かな声で答えた。

「あれ、無くしちゃった」

俺は再び枕に頭を預けようと体を動かした。その時、アレックの枕の上の、書きかけの紙がちらりと見えた。すっかり体を地面に付けた後、俺はすっかり冴えてしまった目を、ぎゅっと瞼で押さえた。アレックが書いていたのは、ロボートへの手紙だった。その手紙の中身、それに俺は絶句していた。

アレックが、あんな手紙を書くなんて思わなかった。あの詩人でロマンチストで、言葉一つで人を魅了するアレックが、あんな平坦で面白くない文章を書くなんて。

それも散々嘘を並べ立てて。

船がフランスに着いた頃、ゴードンはすっかり病から立ち直り、涼やかな顔でジェームズに寄り添っていた。ジェームズが、ゴードンの髪に触れている間、アレック

は遠い眼差しでカモメの飛び去る方角を見つめていた。

港から西部戦線へ、俺達は汽車で移動した。海での長旅で俺達は疲れ切り、揺れる列車の中で黙り込んでいたが、汽車がパリの街を通った時、俺達は初めて声をあげ窓辺に近寄った。

青い空に鮮やかなシャンゼリゼ。そして聳え立つエッフェル塔。あの鉄の塔は美しかった。タンクや飛行機と同じ材質なのに、あの塔の鉄は不思議に細やかで優美に感じられた。平和だったヨーロッパ、素晴らしき良き時代、ベルエポックのその名残を残した塔は、病魔との闘いに疲れきった俺達を自然に癒した。

「ああ、よく残っていてくれたね……」

アレックが一言呟いた。

やがて汽車はシャトー・ティエリーに着いた。列車を軽やかに降り立った俺達は、ふと空気に香った匂いに花を動かした。火薬だ。マッチを擦った後のように焦げ臭い匂いが立ち込めている。

上官の厳しい点呼の後、俺達は並んで戦地のマルヌ川へと向かった。火薬の匂いが強く鼻を刺激する中、俺達は歩き、そして戦争の地へ着いた。そこにはエッフェル塔のように艶やかな建造物もなければ、どこまでも斬壕の続く荒野もなかった。あるのはただ川だった。さやさやとそよそよと囁きながら流れる川だけが、変わらずそこにあった。

「我々は列記とした一己の軍隊！ フランスやイギリスの使い道具ではない！ 諸君！ アメリカ軍としての誇りを持って戦いたまえ！」

我らの最高司令官、パーシング將軍はそうよく通る声で言った。俺達は病やら船酔いやらでしばらく誇りやなんやというものを忘れていたが、米西戦争で功績名たる將軍の演説を聞くと、久しぶりに若い震えが体に走るのを感じた。

マルヌ川の向こう岸に渡された巨大な橋から攻め込んでくるドイツ軍を追い返すため、俺達は合流したフランス兵士らと共に川岸に並び、機関銃の前に陣取った。しばらくは、特段何も起こらなかったが、いつドイツの野蛮兵がやって来るかと、俺達は戦地の土の上で脈打つ心臓を押さえ押さえ眠った。

ある日のこと。いつもの通り川面を眺めながら銃の前で、強張った息をしていると、突然上官の怒鳴り声とドラムの音がした。

「来たぞ！」

と、誰かが叫んでいた。

「来た！ 来たぞ！」

俺は機関銃の引き金にかけていた指の筋肉を、ぎゅつと固めた。まだ敵の姿を目でとらえることは出来なかったが、頭で思い描くことは出来た。俺が描きだしたのは、盛り上がった筋肉の甲冑に身を固め、瞳を血の色に煌めかせる殺しがいがりそうな屈強な戦士だった。

俺の隣にはアレックがいた。幼い顔を興奮で赤く燃えさせたせ、震える指で冷たい銃を掴んでいた。ジェームズとゴードンの姿は見えなかった。

進軍のドラムが鳴り響き、フランスの兵士達が銃剣を

構えて駆けだしていく。やがて、敵軍の姿が近づき露わになった。俺はゲルマンの屈強な戦士への死への弾丸を銃に込めた。

しかし、鉄筒中の弾丸が火を噴いて飛び出ることは、結局なかった。それというのも、敵軍の兵士の姿を見た瞬間、啞然としてしまったのだ。

屈強なゲルマン戦士などいなかった。蛮族もなかった。ましてや、ドイツ人やオーストリア人さえいなかった。いたのは少年達だった。それも俺よりずっと年下の。十六歳か十四歳ほどしかない少年たちが、大人に混じって銃を構えて走っていた。春本を見て笑い、口いっばいにさくらんぼのパイを頬張っていた頃の俺達と同じ年の少年。間違ふことなき子供達が、重い軍服を着、透き通った瞳のままどこちらに向かってくるんだ。あの瞳が、俺はたまらなく恐ろしかった。透明すぎる。あの子達は、何も考えてはいない。何も知ってはいない。新聞と演説を代わる代わる見る度に、あの子達は自分の眼球をあんな風に塗ったんだ。あんな目を、子供がするとは思えなかった。しかし、それはドイツ人だから、オーストリア人だからではなく、全人類が持つ可能性なのだ。

呆然として座り込む俺の背に、上官の怒声が刺さった。

「スタンプス！ この腰抜け！ 撃て！ 撃たんか！」

はつとして隣を見ると、アレックが銃を構え、目を見開いて俺を見つめていた。

「撃てよ、パーシー。撃つんだ。約束しただろ」

乾いた唇が動き、やがてアレックの銃が火を噴いた。灼熱の弾丸が空中を進み、一人の兵士の足を貫通した。

その様子を見て、俺は奇妙に気持ち焦った。引き金を引かねばならない。そうしないことは、あの子供達に色は教え込ませることより、罪深いことに思えた。

俺は撃った。弾はことごとく外れたが、三十発目よりやく人を殺した。死んだのは中年の兵士で、俺はどこかほっとした。少なくとも、子供よりは知っているだろうから。しかし、他の大抵の弾丸は死者に対して平等で、多くの少年が橋や川の中で死んでいった。少年の柔らかな胸が撃ち抜かれる度、俺は必死に目をそらそうとした。ああ、あの子は人生に何度アイスクリームを食べたことがあったろう、弟や妹に何と呼ばれていたのだろう、といった疑問が胸に湧き出て、気持ち悪いことこの上なかった。それでも俺は、彼らを見つめ続けるしかなかった。隣を見れなかったんだ。

やがて、ある程度後退したフランス軍が、とうとう橋を爆破した。敵軍が大慌てで退避していく。前線に出ていたフランス軍が、川向うの敵軍が最早進路を失い、撤退するしなくなっていることを見届けると、次々とこちら側に走って戻って来た。

「勝ったぞ！」

誰かが英語でそう叫び、やがて戦地に歓声が沸いた。俺は汗ばんだ手で顔を覆い、胸から出した暖かい息を、鉄臭い掌に感じた。その肩に、そつと誰かの手が添えられた。見ると、アレックが微笑んでいた。汚れきった顔を、安心で撓ませて。

その日の夜、俺とアレックで宿営地を歩いていると、ジェームズとゴードンにばったり出くわした。二人は煤汚れない軍服で、しっかりとお互いの手を握り合って歩いていた。

「よお」

と、アレックが話しかけた。

「さっきの戦闘では見なかったけど、別の所にいたの？」
「ああ。君らよか、少し離れた所にいたんでね」

そう答えたのは、ジェームズだ。

「汚れたな、二人とも」

「まあ、ずっと銃を使ってたから。君らは随分と綺麗なようだけぞ？」

「まあ」

ジェームズが、真っ直ぐ俺達二人を見つめた。

「俺とゴードンは一度も引き金を引かなかったから」

アレックの顔が、一気に白んだ。彼はわなわなと体を震わせ、ジェームズの方へ近づいた。そして右手を振り上げると、その顔を拳で思いつき殴りつけた。

「アレック!!」

俺は驚いて叫んだが、アレックは地面に倒れたジェームズの腹を、軍靴で何度も踏みつけた。

「この卑怯者！ 恥を知れ！ クソ野郎がよ!!」

俺の静止も聞かず、アレックはジェームズを怒鳴りつけ、いたぶり続けた。固い軍靴で内臓を圧迫される度、ジェームズが苦しそうに呻く。しかし、俺が羽交い絞めにしても暴れ続けるアレックに、ゴードンが突然突進した。突如、横腹を殴りつけられ、アレックはぐらりと体勢を崩した。

「もう止せ!!」

彼は尻もちをついたアレックに怒鳴った。

「お前が俺達をどう思ってくれても構わない。俺達だって、お前に偉そうに出来る立場じゃないもの。でもな！ ジェームズを傷つけることだけは、例え誰であつても俺は容赦しないぞ！」

ゴードンの瞳は、怒りに燃えながらも、清らかで美しかった。その瞳を見た時、アレックは一瞬怯んだような顔をした。しかしすぐに地面から起き上がり、無言でその場を去っていった。しばらくぼんやりと立ち尽くして

いた俺は、ゴードンに言われて慌ててジェームズを助け起こした。

あれから、ジェームズとゴードンの二人に漂い出した新たな空気を、俺は感じ取った。アレックのように多感でなくとも、誰にだってあの香りは感じられる。

あの二人は愛し合っていた。それも滅多にない、尊い愛の関係。二人は何も必要とはしなかった。接吻一つの結び付きさえ。結び付いているのは、身体ではなく、魂だったからだ。そして、お互いを思いあい、支えあい、ただ相手だけを大切に、いかなる哲学者も作家も詩人も参らせるほど、完全なる愛を二人は育んでいた。

ロマン溢れる詩も、激しさも入り込む余地もない二人の間柄は、アレックをひどく苛立たせた。いや、苛立たせたと言うよりは、怯えていたと言う方が正解だろうか。彼はもう、あの二人と口を聞こうとはしなかった。昼はピツタリと俺にくっついて回り、夜はロバートの袖を頬に押し当てて眠り、そしていつか送ったロバートへの手紙の返事を心待ちにして日々を過ごした。

マルヌ川へは、もう一度ドイツ軍が攻め込んできた。アレックの戦い振りは凄まじかった。軍神アレスや毘沙門天もかくや、と思わせるほどだった。彼は安全地帯からの援護攻撃を突然やめ、銃剣を持って徒歩で敵軍に突っ込んでいったのだ。俺が機関銃のそばでぼかんとしている間に、彼は次々に、ドイツやオーストリアの兵士をその刃の先にかけた。アレックの薔薇色の肌と、黒い髪が、血と煙の中に鮮やかだった。

「さあ、やれやれ！ 敵に臆病者だと思われるなよ!!」彼の叫ぶ声が風に乗って聞こえてきた。ほんの少し、

語尾の震えた叫びだった。

そうこうしている内に、敵軍が撤退を始めた。味方の軍も深追いは必要なしと見たか、ぞろぞろとこちらに引き返し始めた。俺のすぐ隣にアレックは駆けよって来た。彼の体に強張りついた血から、若く甘い子供達の香りがした。

その日の夜、焚火を囲んで俺達が、缶詰の塩辛い豆の夕食を食っていると、中年の兵士が一人近寄って来た。俺の隣にはゴードンとジェームズが綺麗な軍服のままであらずそうに座り、正面にはアレックが座っていた。中年の兵士は焚火をぐるりと回り、アレックに手紙を一通渡していった。

「ほれ、バルダーソン。友達からだぞ」

アレックの瞳が輝くのを見て、俺達ははっとした。ロバートからだ。久しぶりの友達からの手紙に、俺とジェームズとゴードンは、先日の諍いも忘れ、いそいそとアレックに近寄った。

アレックは紙の上の文字をもどかし気に目で追った。瞳が、これ以上ないというほど明るく輝いていた。

しかし、その瞳が紙の下の方へ移動すると、突然ドロリと濁った。紙を掴む指がわなわなと震え、手紙は地面の上に落ちた。アレックが喉をそらした。そして布を裂くような声で絶叫した。

俺達は驚いて、アレックが落とした紙を拾い上げて目を走らせた。ひどい手紙だった。知らず知らずのうちに、手紙を握る俺の指が震え出した。そして、その最後の文に、アレックにとつてはあまりにも酷すぎる一文があつたのだ。

「ところで、僕に結婚話が来ています。お相手はさる石油会社のお嬢さんです。早い話かもしれないけれど、僕

は結構乗り気ですよ」

最早俺達に出来ることはなかった。彼に何と声を掛けたいのか分からなかった。俺達はただ、絶叫し続けるアレックを呆然と見つめるしかなかった。

シャトー・ティエリーでの戦いは、どうやら我々の勝利で終わったようだ。俺はこの勝利が新聞の上で、どれほど華々しく飾られることだろう、と静かに思った。

マルヌ川から引き上げる日の前夜、上官の一人がアレックの元へやって来た。彼の鬼神のような戦い振りを聞いた。パーシング將軍が、ぜひ夕食を共にしたいと言った。アレックは、盛んに喋る小太りの上官を見つめてぼんやりとしていたが、その沈黙を上官は同意と見たようだった。「では、九時になったら来たまえよ」と揚々といい、背を向けた上官に俺は急いで駆け寄り、呼び止めた。

「あのつ、すみません！ 彼はちよつと今、何ていうか、精神的に不安定なんです。だから、私も一緒に構いませんか？ 横に立ってるだけでいいですから……」
人の好い上官は、「ああ、別に構わんよ。上には私が上手いこと言っておこう」といい、自分のテントへ帰っていった。

夜九時、テントの中に俺とアレックは招き入れられた。長机に向かって、軍のトップクラス達、ジョージ・マーシャル大佐、ダグラス・マッカーサー准将、フォックス・コナー大佐、そしてジョン・パーシング將軍が座していた。以前なら舌が上顎に張り付くほどの緊張を覚えただ

ろうが、しかし妙なことにあの夜は、軍のトップ達がただの牛乳配達のおじさんに見えた。

「バルダーソン。スタンパス。遠慮せずに掛けるといい」
コナー大佐がそう言ったが、アレックは動かなかった。俺はふと、あの人の好い上官はいないことを不安に思った。

「前線での活躍を聞いたぞ、バルダーソン」
命令を無視したアレックに首を捻りながらも、パーシング將軍がにこやかに言った。

「君こそわが軍の鏡となる若者だ。あの勇氣溢れる戦い振り！ これからも我が祖国のため戦ってくれたまえよ！」

「嫌です」

アレックが言った。きつぱりと、そして震えながら。俺も上官達も、ぼかんとして彼を見た。

「嫌です。戦いませぬ。もう国へ帰してください」

しばらく、ぱかつと口を開けていたマーシャル大佐が、アレックの口ぶりにさつと、顔に色を取り戻した。彼はわなわなと両手を震わせ、真っ赤な顔をして怒鳴った。

「何を言うんだ、バルダーソン！ まだ戦いは終わっていない！ 祖国のために銃を取ったのはお前ではないか！」

「国のためになんか戦っちゃいませぬ！」

アレックが泣き出した。絶望に濁った瞳から、濁った涙を流して。

「俺はただ恋のために戦いました！ ただ好きな人のために普通の人を殺しました！ 祖国のことなんてどうでもよかったです！ でもあの人には裏切られ、もう戦う理由も失くしました！ もしあなた方がまだ続けたらというのなら、じゃあ俺は後は何のために戦うのでしょうか!! こ

れからする殺人は一体何のための殺人なんでしょう!!」
泣きじやくりながらアレックはあの袖の切れ端を取り出し、頬に押し当てた。

「もう帰してください！ ここには事実しかありやしない！ 国に帰りたいんです！ ロバートに会いたい！ 会ってちゃんと伝えたい！」

「ロバート!! ……男の名か……」

マッカーサー准将が立ち上がり、アレックの方へ歩み寄った。そして突然彼の髪を掴んで、机の角に打ち付けた。

「この恥晒しが!!」

准将の怒声が床に倒れたアレックに降り注いだ。

「わが軍にこのような恥ずかしい人間がいたとは！ ええ!! バルダーソン！ お前など訓練兵の足元にも及ばんわ！」

「ええ、その通りです！」

アレックが血と涙に濡れる顔を上げて叫んだ。

「俺はそんな立派な人間じゃない！ もっと月並みなやつなんです！ でも、それは俺だけじゃなくてみんながそうなんだ！ 殺すのも殺されるのも、みんな大して優れても劣ってもいない、普通の人達だった！ 誰が英雄になんかなれるもんか！ 戦場の英雄ってのはな、もうどこにも行けない、帰れない、戦うしかない、そんな人間が何もかも見失って銃だけを杖にしてる、そういうやつなんだ！ 狂ってんだよ！ 英雄ってのは！ アンタ

らはそんな人間が素晴らしいうて言うのか!! 臆病であることを無理矢理否定するってのか!!」

准将が軍靴の足をアレックの上で振るった。それを見て俺は動いた。何を考える訳でもなく、咄嗟にアレック

の上に覆い被さった。

「もうやめてください!」

俺の叫びをパーシング將軍の怒声が追った。

「スタンプス! お前もバルダーソンと同じ恥知らずか!」

「何が恥かは分かりません! ただ俺はもう友達に傷つけてほしくないだけです!」

俺の目からも涙が溢れた。アレックが受けた傷の痛みが、そのまま流れ込んでくるように感じた。

「あなた方にこの人を傷つける権利がありますか!! あの子供達を、敵だと決める権利がありますか!! 一体どうして、俺達だけがこんな目に合うのですか!!」

勢いよく口に出せば、激情が俺の中を満たした。どうしようもないほどの悲しみが、怒りが、アレックの背を通して心に染みわたった。

「どうして」

アレックがポツリと呟いた。泣き声は混じっていないかった。ただひたすらに冷え冷えとする、奇妙なほど静かな声だった。

「どうしてですか? どうして俺達はこんな所で戦っていて、他の人達は安全な所で笑っているのですか。どうして、何も知らず、気づきもしない人が、あんなに幸せそうなのですか」

テントの中に沈黙が流れた。誰も何も言わなかった。

怒りも侮辱も、何も生まれなかった。しばらくの静けさの後、不意にテントの外が騒がしくなかった。すると、ゴム毬のように太った体を揺すりながら、あの人の好い上官が、転げるようにテントの中に駆け込んできた。

「將軍殿! 外を歩いていましたら中の様子が聞こえてきました! いやあ、うちの部下が本当に無礼なことを

言ったようで……! いや、もう何とお詫びを申し上げたらよいか……はいはい! この二人は私から後でキック言っておきますので、はい!」

上官は俺とアレックを床から立たせると、俺達の後頭部に手を置き、ぐいっと前に倒した。その大慌てな様子に、ほんの少し將軍は落ち着きを取り戻したのか、また気難しそうに腕を組んだ。

「いや、全くだ。君も部下の教育を一層厳しくするように」

「はいはい! そう致します、將軍殿! ……しかし……」

上官が俺達から手を放し、顔を上げた。將軍を見つめ、ふっと暖かい笑顔を顔に広げ、そして言った。

「パーシングさん。あなたもやっぱり人間だ」
彼は素早く踵を返すと、俺とアレックを追い立てながらテントを出て行った。外の空気がひんやりと俺達を包んだ。

「すまなかったなあ、バルダーソン。スタンプスから事情を聞いた時に、誘いを断っておけばよかったなあ。すっかり油断してしまっただよ」

彼は振り向いて、掌をそれぞれ俺とアレックの頬に当てた。暖かい手だった。

「かわいいそうに。かわいいそうになあ」

その夜の間中、アレックは泣き続けた。泣いて泣いて、ロバートの袖をぼろぼろにした。

「帰りたい……帰りたいよう……おつかさんに会いたい……おつかさんに……ロバートに会いたいよう……」

やがて彼は身を起こし、枕の上で手紙を書き始めた。

「気がついて……お願いだから気づいて……」
そう何度もつぶやきながら。

「気がついて……お願いだから気づいて……」
そう何度もつぶやきながら。

シャトー・ティエリーの戦いの後、俺達はアルゴンヌへ行くことになったが、その間、パリに一月ほど滞在することが許された。あのマルヌ川の惨事を物ともしないような美しいエッフェル塔を、行きとは違う思いで眺めた。

パリの街をぶらぶら歩いて、ベルサイユ宮殿やルーブル美術館を見物したりもしたが、専ら思い出すのは夜を幾度も過ごしたフランスの少女達だった。

ジェームズとゴードンは頑として行かなかったが、俺とアレックはよく娼館に行った。そしていつも、俺はアレックの前に少女を選び、部屋に入った。

彼女も俺も、片言のフランス語と英語で語り合った。彼女の血の流れは、空襲に怯えた激しいビートを打ち、そのリズムは俺の血の流れと交じり合った。彼女は俺と同じ風景を目に映していた。

何度目かの朝、俺はアレックの指名の相手を知った。金髪と青い目の少女だった。

このことを、きくと彼はロバートへの手紙に書くだろう、と俺は思った。そして彼女との寂しい語らいを考えてみて、と最後に書くのだ。そう思うと、俺は娼館の床に座り込んで、長いこと泣いた。

やがて、アルゴンヌへと発つ日がやってきた。次の戦地は川ではなく森だった。銃撃で緑のなくなった森での戦闘は、シャトー・ティエリーよりも悲惨だった。混乱

やがて、アルゴンヌへと発つ日がやってきた。次の戦地は川ではなく森だった。銃撃で緑のなくなった森での戦闘は、シャトー・ティエリーよりも悲惨だった。混乱

やがて、アルゴンヌへと発つ日がやってきた。次の戦地は川ではなく森だった。銃撃で緑のなくなった森での戦闘は、シャトー・ティエリーよりも悲惨だった。混乱

やがて、アルゴンヌへと発つ日がやってきた。次の戦地は川ではなく森だった。銃撃で緑のなくなった森での戦闘は、シャトー・ティエリーよりも悲惨だった。混乱

やがて、アルゴンヌへと発つ日がやってきた。次の戦地は川ではなく森だった。銃撃で緑のなくなった森での戦闘は、シャトー・ティエリーよりも悲惨だった。混乱

やがて、アルゴンヌへと発つ日がやってきた。次の戦地は川ではなく森だった。銃撃で緑のなくなった森での戦闘は、シャトー・ティエリーよりも悲惨だった。混乱

と恐怖の中で、俺達は戦った。

アレックは激しく戦った。絶望もやるせなさも全てかなぐり捨てるように、叫び、撃ち、刺し、そして狂乱した。その間にひたすらロバートからの返事を待った。いつかこの悲しみを、恐怖を分かってくれる、と乏しい希望を元に彼は生き伸びた。しかし、ロバートは彼を救えなかった。ロバートは何も気づかず、気にかけて、俺達にもつと戦えと書いて寄越し、じゃんじゃん武器を作っては儲けた。

ロバートからの返事が来る度に、アレックは軒塚の寝床の上で泣いた。隣に寝ている俺の耳にも、その鳴き声は沁み通った。

ある夜、秋のほんの少し涼しい風がひょうひょうと吹く中、アレックは寝床の上でいつものように泣いていた。手にはシャトー・ティエリーでの彼の武勲を讃えるロバートの手紙が握られていた。

「ここへ来て……ここへ来て……ロバート」
彼の震える声が、嗚咽の間から聞こえた。アレックはしばらく「ここへ来て」と繰り返していた。やがて、繰り返す内に震えが次第に消え始めた。

「来い……ここへ来い……ロバート」
あの鈴の転がるような声が、突然冷たく低く、重たくなった。俺は背筋がぞつと栗立つのを感じた。

「お前をここに引きずり出してやる……お前に人を殺させてやる……俺が味わった苦しみ全部、お前にも味わわせてやる……」

アレックの静かな声が、やがて呪詛へと変わった。俺は恐ろしさでガタガタ震え、着ている軍服ごと己を掻き抱いた。背を触れ合わせているアレックが、まるで全く知らない人に感じられた。やがて、彼の低い声が、ポツ

リと言った。

「お前だけ幸せになんてさせないぞ……ロバート」

次の日の戦闘は、それはもう悲惨だった。味方も敵も分らないほどめっちゃくちゃに戦い、ただ生き延びることだけを思っていた。ジェームズとゴードンは、砲弾を掻い潜り、銃は使わず走り続け、アレックは嫌に目をギリつかせながら銃剣を振った。

戦闘が一段落し、塚に戻ると、昨日までに数度言葉を交わしたところのある仲間達の姿が見えなかった。俺やアレック、ジェームズ、ゴードンが全員揃って無事だったのは、まさしく奇跡だったろう。

あの激しい戦いの後、疲れ切っているにも関わらず妙に気持ちが高ぶっていた。他の兵士達も同様に、嫌に頬を赤くし、目をギリギリさせていた。あの日、兵士達の間に流れていた高ぶりは、ジェームズとゴードンの中にもあった。そしてそれは、あの二人の清らかな繋がりにも通俗が入り込む余地を与えてしまったのだ。

夜八時、夕飯の缶詰やらパンやらが入った木箱をみんな運んでいると、向こうからアレックの声がした。

「隊長！ 大変です、隊長！」

アレックの声に、俺のすぐ隣にいたあの人の好い上官が振り向いた。俺も上官の視線を追うと、アレックが片手にジェームズの右手首を乱暴に掴んで、こちらに大股で歩いてくるのが見えた。その後ろを、泣きそうな顔のゴードンが小走りについてくる。

「ん？ 何事だ、バルダーソン？」

「隊長！ 先ほどこいつらが軒塚の影にいるのを私が見つけました！ それで近づいて行ったら、こいつら……」

こいつら！」

アレックが上官のすぐ目の前にジェームズを突き飛ばした。地面に倒れたジェームズに、ゴードンが素早く駆け寄る。俺の驚いて丸く開かれた目に、見たこともないほど下品な笑みを浮かべたアレックが映った。

「こいつら、恥ずかしいことをしてたんです！ ああ、腹の立つ！ どうぞ隊長、こいつらに罰則を与えてください！」

俺はようやく気が付いた。アレックは気が付いたのだ。ジェームズとゴードンの間に生まれた隙を、気持ち悪いくらい、正確に嗅ぎ取ったのだ。

「なるほど、バルダーソン。よくわかった。」

上官が地面に座り込んだジェームズとゴードンを見下ろし、右手に小さな鞭を握った。

「軍隊における規律を乱すような行為は厳禁になっておる。お前ら、そういう事をしたんだな？」

「間違いありません」

ジェームズが静かに言った。その声の、あまりの落ち着きぶりに、好奇の目で二人を見ていた兵士達がはっと目を瞬かせた。ジェームズとゴードンは胸を張り、真っ直ぐ上官を見つめていた。その様子は、まるで真の通った武人の立ち姿のように気高かった。アレックの顔から、下卑た笑みが突然さつと消えた。

「もう二度と、そんな軽はずみな行為をしてはならんぞ。分かったか？」

「はい、隊長。俺達が浅はかでした。気を付けます」

「うむ、よろしい。罰として右手首に鞭打ち三回。いいな？」

手首を打たれる間、二人は呻き声一つ上げなかった。罰則が済むと、上官は「さあ、飯の支度をしてこい」と

言つて早々に背を向けた。二人が彼の広い背に、深々と頭を垂れた。二人を冷やかしたり、罵倒したりする者はおらず、みんな銘々の仕事に戻り、静まり返っていた壕がまた再び騒がしくなっていた。あの、兵士達の間に流れていた妙な高ぶりも、いつの間にか消え去っていた。

その時、「待つて下さいー」と突然誰かが叫んだ。見ると、アレックが青い顔で上官の背を見ていた。

「これで終わりですか!」

上官が振り返つてアレックの顔を見た。あの夜、「かわいそうに」と俺達の頬に触れた時と同じ瞳でアレックを見つめると、やがて彼はそつと頭を垂れて去っていった。空気の中に、あの上官の視線の温度が、じんわりと残っていた。

アレックの瞳を、見る見るうちに憎悪の色が覆つた。彼はその憎悪を、地面の上のジュームズとゴードンに向けた。

二人はアレックの方など、ちらりとも見なかった。ただ、お互いの瞳の中に世界を見ていた。

戦いの日々が続いた。戦況が行き詰まる度、敵に子供が増え、俺達に殺された。もう何人死んだか分からない。彼らの死に顔を思い出すことすら億劫になつていた。

戦闘の直後、アレックは体中に血を付けて、壕の壁にもたれていた。まだ赤々とした血液から、幼い香りが立ち上つていた。

「なんで俺ばっかり……なんで俺ばっかりこんな目に……なのになんでアイツは幸せそうなんだ……なんで死んでいくのは、ああいう人達ばかりなんだ……」

アレックがブツブツと呟いた。呟く内に声が静かにな

つていく。俺は身を強張らせて地面に座つた。耳を塞ぎたかつたが、どうしても手が上がらなかつた。そしてアレックは、今でも嘘のように思えるようなことを言ったのだ。

「ロバートが死ねばよかったのに」

あまりの驚きに、俺は発条仕掛けの人形のように立ち上がり、アレックに詰め寄つた。

「馬鹿言え! ロバートは大事な友達じゃないか! 恋人にはなれなくても友達なのは変わりないだろ!」

「本当にそうか? パーシー。本当にロバートは俺達のこと、友達だと思つてたのか?」

俺ははつとして黙つた。アレックはさらに続けた。

「ロバートはよく手紙で俺達のこと励ましてくれるよ。

そりやそうだよな。俺達が必死に戦つて戦争が長引けば、それだけアイツは儲かるんだもんな。なあ、パーシー」

アレックが俺を見た。

「昔の俺はあんなヤツのために、戦おうとしたんだな」

俺の軍靴の裏が、ざりざりと音を立てて、地面の砂利を擦つた。全身に震えが走り、喉がひゆうひゆうと音を立てた。じりじりとゆっくりアレックから後ずさり、やがて俺は勢いよく走りだした。

壕の中を縦横無尽に、めちゃくちゃに走つた。涙で視界が霞んで、何度か人にぶつかりその度に怒鳴られたが、俺は止まらなかつた。心がぐちゃぐちゃに掻き乱れ、悲しいのか怒っているのかも分からなかつたが、一つだけ、胸の奥ではつきりと分かることがあつた。ああ、もう終わつたんだ、と。

五人で自転車を乗り回し、映画を見、アイスクリームを食べる日々はもう終わつた。ジュームズとゴードンの二人にアレックが何事もなく話しかけることはもうない。

そして、アレックとロバート、二人の美しい少年の無邪気な戯れに胸を打たれる日はもう来ない。アレックのロバートへの弱弱しい思いは、今では憎悪となつたのだ。

俺は人のいない場所まで来ると、しゃがみこんで泣きじゃくつた。乱雑に広がつた思いが、悲しみの枠の中に納まつた。ただ寂しさや、やるせなさで押し潰されそうだった。泣いて泣いて、泣き続けて、そしてふと思つた。

(どうしてロバートは兵士になれなかつたんだ?)

そう思つた時、涙が突然すつと止まつた。濡れた頬に、風が染みだ。

(そりや、彼が落選したからさ。でも、どうして俺達の中で、ロバートだけが外れたんだ?)

立ち上がつて、しばらく地面の上を歩き回つた。そして、答えが出た。

(違う。逆に彼は選ばれたんだ)

握りしめた指の爪が、掌に食い込んだ。

(そうだ、アイツは金持ちの息子だ。戦争に必要な鉄鋼を取り扱うために、アイツは国から必要とされた。だけど俺達は違つた。これといった地位も家柄も、失いたくない能力もない。必要なかつた。戦争で人を殺したつて、死んだつて構わない人間だったんだ!)

止まつていた涙が再び溢れ出した。泣く内に、悲しみが次第に消えていつた。そして、途端に体の内側で、熱い炎がゆらりと立ち上がった。あの時俺は、ロバートを激しく憎んだ。

(アイツ……アイツめ! 何が友達だ、畜生! 本当は勉強が良く出来て、頭だつて良かったのに、不良ぶつてバカを演じてたんだ! そして猫を被つて俺達に擦り寄りやがつた! そうさ、アイツは俺達のレベルに合わせたんだけ! 俺達のことを、バカで不良で下品だつて思つ

てたから自分もそうした！ 俺達のこと、最初っから見下してたんだ！ 畜生、畜生！ あのカマトトめ！ お前は友達じゃなかった！ お前は別の人間だったんだ！ 涙に濡れた目で、空の彼方を睨んだ。そして、絞り出すようにこう言った。

「ロバート、お前が死ぬばよかったのに」

レイは静かだった。大好きな祖父を侮辱されても、怒りはわかかなかった。ただ、目の前の青年の話を、聞き続けた。

あの日から、俺を壕の外へ駆り出すのは、ただ怒りだけだった。国で平和に暮らしているロバートが憎らしくて、憎悪に駆られるまま俺は戦った。

「パーシー。そっちは寒くないかい？ お腹を空かせてないかい？ お母さんはいつも、お前のことを思っているからね」

ある日、こう書かれた母からの手紙を読んだ時、俺は久しぶりに静かで穏やかな気持ちになった。しかし、時が経てば再びロバートへの憎しみが立ち上がって、俺を戦場へと押し出した。そして熱が冷えていくと、血と灰に塗れた自分の匂いに吐きそうになった。やがて夜が来れば、土の上で泣いた。何日も何日も、そうして生き延びた。

俺が足に傷を負ったのは、十月のことだった。秋の冷たい風を頬に受けながら、俺は前線を走っていた。すぐ隣にはアレックがいて、ジェームズとゴードンはずっと

後方に位置していた。

（死んでしまえ！）

俺は走りながら、心の中で唱えた。きつとアレックもそうだったろう。あちらこちらで轟音と共に湧き上がる煙を避け、俺達は敵陣へと突っ込んでいった。俺の銃から吹き上がる弾丸が、ドイツやオーストリアやハンガリーに生まれた人々を撃ち殺した。

（死んでしまえばいい！）

やみくもに走り、撃ち、怒り狂っていた、そんな矢先だった。突然片方の膝に熱いものがあたり、俺はぐらりと体をよろめかせた。地面に激突するまで、二秒とかからなかった。地に倒れ伏したまま、理解の追いつかない頭を振って片足を見、俺は全身の血が血管を急降下するのを感じた。大量の赤々として健康的な血液が、ドクドクと足から流れ出ていた。何度も見たはずの血が、今は自分から流れ出ているんだ。

兵士達の雄たけびが、銃撃の重い音が、強烈な爆発音が、耳元で低く唸った。このまま座り込んでいれば、逃げようにも逃げられない。しかし、立ち上がるうとしてもその度に足に激痛が走って地面に倒れてしまうのだ。体にぞくりと寒気が走り、股座が恐怖でじわりと湿った。

（どうしよう！ 取り残されてしまう！）

そう混乱する頭で何とか思った時、前方に揺れるアレックの軍服が見えた。

「アレック！」

俺は力の限り、遠のいていく彼の背に叫んだ。

「足を撃たれた！ 助けてくれ！ 動けないんだ！」

彼の足のスピードがほんの少し緩んだ。俺はさらに、大きな声で叫んだ。

「助けてくれ！ ああ、ダメだ！ 痛くてたまらない！」

きつと切断される！ アレック！ こっちに来てくれよ！ 俺はもう歩けないんだ！」

彼は俺を見つめてしばらく立ち止まっていた。しかし、やがてゆっくり背中を俺に向けると、また遠くへ駆け出して行ってしまった。

「アレック!!!」

次の叫びには泣き声が混じった。俺は血の気の失せた冷たい頬に熱い涙を流しながら、煙の中に消えていった彼を必死に呼んだ。

「アレック！ 戻ってきてくれよ、アレック！ もう一度戻ってきてくれよ！」

俺の命の限りの叫びは、爆発音にすぐさま掻き消された。煙の中からアレックが戻ってくることはなかった。

しばらくすると、俺はもう叫ぶことにも疲れてしまった。目を閉じて、そっと地面に臥せた。

その時だった。

「パーシー！」と叫び声が耳元でしたかと思うと、誰かの腕が自分に絡んで、ぐいっと体を持ち上げられた。

驚いて目を開けると、右の頬のすぐそばにジェームズの顔が、左の頬のすぐそばにゴードンの顔があった。

「大丈夫だ！ 今助けるからね！」

二人は口々にそう言い、両側から俺を支え、足に負担がかからないよう立ち上がらせてくれた。やがて俺達は進み始めた。アレックとは違う方向へ。

目が覚めたのは野戦病院の中だった。あの激しさが支配する戦場とは打って変わって、病院の中は静かだった。いきなり叩きつけられる死とは違う、刻一刻と迫る静かな死の香りが、冷たく立ち込めていた。

「お目覚めになった？」

片言の英語の音が枕元でし、驚いて寝返りを打つと、十六、七歳ほどの看護婦が立っていた。頷くと彼女はにっこりと笑い、濡れた布で俺の顔を拭ってくれた。

「あなたのケガ、あんまりひどくないです。タマ、かすただけ。一週間ぐらいで治ります」

彼女は優しい声で言った。俺はその言葉にほっと息をついた。よかった、また歩けるんだ。しかし、突然、氷を飲み込んだ時のような冷たさがさあつと胸に広がった。そして気づけば、俺は彼女の細い手首を強く握りしめていた。

「治さないでくれ」

震える声でそう言った。それを聞いた若い看護婦が、怪訝そうな表情を浮かべた。俺は身を乗り出して、さらに強い口調で言った。

「頼む！ 治さないでくれ！ このまま動けなくしてくれ！」

「できない！」

彼女が俺の手を振り払った。その目に真っ直ぐな色が浮かんでいた。いつかアレックや俺が持っていた物と同じ色。

「私の仕事、人を助けること。ケガしてる人、放つておくの、違います。あなた、必ず助けます」

彼女はスカートを翻して去っていった。俺は再びシーツの上に身を落とし、目を閉じた。すると今度は男の声

が、「パーシー」と俺を呼んだ。いつの間にかジェームズとゴードンが、枕元に立っていた。

「さつき先生と話してきたんだ。そんなにひどい怪我じゃないから、一週間くらいでまた戻れるって」

「そう」

ジェームズの言葉に、俺は消え入りそうな返事をした。そして「アレックは？」と小さく聞いた。

ジェームズは何も答えなかった。俺はシーツの上で膝を抱えて座り、膝の間に頭を入れた。したたり落ちた涙が、シーツの上で水玉模様を描いた。

「なんだよ……なんだよ、畜生……」

衣擦れの音がして、気づけばゴードンが俺の頭を抱きしめていた。彼から、懐かしい夏の日差しの香りがした。

「俺達、友達じゃなかったのかよ……」

一週間が経ち。俺はアレックと戦地で再開した。

「お前の所へは行ったよ」

そうアレックは言った。

「お前が寝ているときに。毎晩会いに行つてた。顔が見たかったから」

「起きてる時に来てくれればよかった」

俺の言葉をアレックは無視した。そしてポケットから書きかけの手紙を出して渡した。

「ミスター・ロバート・クロス。相変わらず銃を構えて

走り続けています。もう戦争にも大分慣れたはずですよ。

一度足を前に出すとね、もう横も後ろも見ることなく走っていくんだ。光り輝く前だけを見つめてね。ねえ、ミスター・クロス。おもしろかったですか？ 私の手紙は」

「パーシー」

手紙を読み終えると、アレックが俺の名を呼んだ。顔を上げると、彼はちよつぱり笑っていた。

「俺、シーと別れるよ」

俺はふと、心に思った。

ああ、負けたんだ。俺達は。

十一月十一日。寒い冬の日。クロスからたぐさんの酒や食べ物がたくさん届いたが、俺やアレックは受け取らなかつた。ジェームズとゴードンでさえそうだった。

その日に、最終目標地点であるスタンを攻略した。それで最後の戦闘だった。足はちつとも痛まなかつた。

ムーズ・アルゴンヌ攻勢は、わが軍の勝利で幕を閉じた。それと同時に、ドイツのキール軍港で起こった革命が元で戦争も終わった。出征前、あれほど憎んでいたドイツ人に、俺達は救われたのだ。

あの変わらず華やかだったニュージャーシーの港を、何と言いませばいいのだろう。あそこにあつたのは、行きた変わらない風景で、傷一つないにぎやかさだけがあつた。大量の旗や、花、音楽に人が、病や戦死でこつそりと数の減つた俺達を迎えてくれた。二年経つても変わらない、海に向かうその国のお祭り騒ぎを、俺達は見つけた。

激しいブラスバンドの音楽が吹き荒れる中、タラップが降ろされ俺達は船を下りた。そして奇妙なほど豊かな港の地面を軍靴に感じた。港に軍服が広がっていくと、戦勝を祝う人々の声が俺達を襲つた。

「おめでどう！ おめでどう！」

ヨーロッパや中国では、この「おめでどう」はどんな意味になるだろう、とポツリと思つた。

そして俺達は彼に会つた。ロバートに。

「ああ、みんなお帰り！」

そう言うって両手を広げるロボットは変わらず美しくかった。春の盛りだった。豊かさの愛撫を盛んに受けたその、能天気な美に、心の中でゆらゆら揺れていた憎しみが燃え上がるのを感じた。

だけれど彼に抱きしめられた時、すつと憎悪が鎮まるのを感じた。ロボットのあのふんわりとした体つき、香水の奥にやっぱり潜んでいたビスケットの香り。それを体で感じ取って、俺はあの懐かしい夏の日々を思い出した。ロボットのの中に残っていた夏の日々。

しばらく俺達四人でふざけあっていた。ジェームズとゴードンも、あの戦場で得た魂の気高さも何処へやら、ただ笑い、はしゃぎ、普通の友達に戻ってしまったようだった。ロボットもしばらくすると官能的な美貌が剥がれ落ち、ただのクソガキになっていた。そんな風に笑いあっていると、荒れた両手がロボットの背後からにゅつと突き出て、彼の両眼を覆った。ロボットが驚いて振り向くと、アレックが幼い笑みを浮かべて立っていた。彼の黒々と濡れた目が、夏の日差しを受けて煌めいていた。

汽車に乗って故郷の街に帰ると、さつそくロボットに夕食に誘われた。彼の無邪気に嬉しそうな顔を見ると、断る気も起きず、俺達は了承した。ロボットはさつそく使用人を俺達の家にやって、連絡を頼んだ。

不思議な夕食だった。あれほど俺達に無礼な態度を取っていた彼の両親が、突然俺達をにこにここと迎え、丁寧に重にもてなしてくれたのだ。彼らはアレックに握手を求めると、「素敵な手紙を戦地から送ってくれて、どうもありがとう。とても楽しい手紙だった」と口々に言った。アレックは大人しく微笑して返した。

振舞われた食事は美味かった。例えどんな思いを抱えていたとしても、あの獣じみた生活の後に食べるちゃんとした飯は文句なく美味かった。実の入ったスープも、柔らかく茹でた豆も、焼き立てのパンも。でもそんなしよなものないことで、あらゆる思いが打ち消されてしまうのも、何となく情けなかった。

戦争の話をしてくれ、と頼まれる度に、アレックは快く答え、盛んに喋った。隠していた部分もあったし、嘘の部分もあったが、それに気づけるのは、俺とジェームズとゴードンだけだった。アレックがふざけて銃を撃つ手真似をすると、俺もおどけて椅子からドツと落ちた。客間に笑いが膨らむ中、足の古傷がズキリと痛んだ。

あの苦悩は一体何だったのか、と思うほど、アレックは陽気に戦地の出来事を話した。それでも、彼は必ず分りにくい話だけをした。いくらでも解釈の入り込む余地のある話ばかりを。そんな話を、ロボットは疑う様子すら見せず、ただにこにこワインと共に聞いていた。

食事が済むと、ロボットとアレックは連れ立って煙草を吸いにベランダに出た。俺とジェームズとゴードンは互いに顔を見合わせると、「玉突きをしてくる」と言って遊戯室に揃って向かった。

部屋の中で、だからだとキューをいじりながら何げなくムかし、先ほどとは打って変わって静かに過こした。「何も知らないんだな、あの人は」

ゴードンがボツリと呟いた。それを聞いた時、俺はなつかしさのあまり消えかかっていたロボットへの憎悪が再び燃え上がるのを感じた。あの能天気で小綺麗な顔を思い出し、キューを握る指に

力が入った。

「何も知ろうとはしなかった……」

唸るように、俺は言った。

「何も知ろうとはしないんだ……あんなに苦しかったのに！ あんなに辛かったのに！ アイツだけ何も変わらうとしなかった！」

「バーシー」

ジェームズが俺を見つめていた。穏やかな瞳だった。

「ロボットを恨んじやいけない」

「馬鹿言うなよ、ジェームズ！ アイツは自分の儲けのために俺達を戦わせて、自分は何事もなく暮らしてただぞ！」

「確かにそうかもしれない。でもロボットを憎んで何の解決になる？ お前があの人を憎めばそれだけ、戦争が増えていくだけだ」

「じゃあ、どうすればいいんだよ！ あんなことをされたのに、この怒りは一体どこにぶつけりやいいんだ！ 大統領か？！ 政治家か？！ 武器商人全員か？！ 一体、誰が俺達を分かってくれるてんだよ、ええ!!」

俺の怒声に、ジェームズは眉尻を下げた。あれほど戦場で高潔だった彼が泣きそうな表情を浮かべて言った。「分からない。これからどうすればいいのか、俺にも分からない。分かるのはただ、恨みだけじゃ何ともならないってことだけだ」

俺は何だかジェームズやゴードンに見つめられるのが怖くなった。妙に気持ちが焦り、落ち着かなくなり、俺はキューを玉突き台の上に置いて部屋を出ようとした。その時、「バーシー」とゴードンに呼び止められた。

「俺、お前のこと大好きだよ」
振り向くと、彼はいつも通りに目を細め、口を精一杯

広げて笑っていた。

「お前のことも、ジエームズのこと、アレックもロバートも、俺、みんな大好きだよ。みんな、大事な友達だと思ってる。これからもずっと、みんな大好きだよ」

もう居た堪れなかった。俺はゴードンから顔を背け、足早に部屋を出ると、アレックとロバートのいるベランダに向かっていた。

二人が月の光を浴びて立っていた。暗闇の中はほっそりとした背が白々と浮かび上がり、煙が二つ、天へ向かって細く昇っていた。俺は二人の様子を、カーテンの影から覗き見た。

「お前の袖だよ。世話になった」

アレックがそう言い、今はもう過去になったあの袖の切れ端を、ロバートに渡すのが見えた。ロバートの不思議そうな声が後に続いた。

「持ってたらしい」

「いいんだ。俺が勝手に持ってちまったんだもの」

オレガカッテニ……物悲しい響きだと思つた。

しばらく、二人の煙を吸う音と虫達の歌声だけが響いていた。虫達の愛の歌は、少し前まで滞在していたアルゴンヌの森で見た、あのしたたかで元気なコオロギを思い出させた。

「シシーに別れの手紙を出したんだ」

アレックが言った。続いてロバートが驚いて息を飲んだ。俺は静かに目を伏せた。

アレックの最後の賭けだ。これが本当の本当に最後のチャンスだ。知らず知らずの内に、心臓がドクドクと騒ぎ出した。

ロバートはしばらく黙っていたが、やがて小気味よくポンと手を打って言った。

「さてはお前、戦争中にどこぞのパリ娘に恋でもしたな！」

アレックが絶句した。俺も言葉を失った。そのまま声を凍り付かせていたが、アレックが突然沈黙を破って笑い出し、ようやく「うっ、うっ」という唸り声を、俺も出した。

アレックは負けた。

甲高い笑い声が夜の空に響いていた。アレックは笑った。狼が遠くの仲間に思いを伝える時のように笑った。半分泣き喚いているかのように笑った。笑って、笑って、帰る時が来ると、俺達と一緒にふざけながら帰った。ロバートの前で俺達は、最早酔ったふりをするしかなかった。

もう誰も出歩いていない暗くて狭い路地に出ると、アレックの足取りが突然ふらつき、彼は地面に座り込んだ。「畜生！ 畜生！」

彼が下を向き、震える声で叫んだ。聞く者の胸にもしんと沁み通ってくる、切なく苦しい声だった。「畜生！ なんで気づいてくれなかった！ アイツだけ何も知らないまま！ 何も変わらないままだった！」

「アレック！」

ゴードンが膝を付いて彼の肩を抱いた。瞳には悲しみと優しさが入り混じっていた。

「打ち明けるんだ！ 俺達が味わった苦しみ全部、ロバートや他の人に！ 何か行動すればきつと変わるはずだよ！」

「話したところで信じてもらえないかよ……」

アレックが次は静かに言った。

「ゴードン。俺達は苦しんだ。だけど戦争に勝ったんだ。勝てばこの国の人は喜ぶ。俺達をよくやったと褒めてくれる。戦争が輝かしい名誉になる。そんな中、俺達が苦しかった、辛かったと言つてもまともに聞いてもらえるか？ ゴードン、ロバートや他のみんなにとって大事なのは勝利だったんだ。俺達じゃない。俺達のことはどうでもよかったんだ」

アレックは服の袖で乱暴に目を擦った。

「思うことと、本当のことは全く別だった。あそこにあったのは、ただ人間と事実、それだけだ。でもそんなことみんな信じてくれるか？ いや、信じようとしてくれるのか？ ロバートだってそうだ。ロバートが同じように何人もいるんだ。そんな人達にとって、俺達の苦しみになんてちつぽけでどうだっていい事なんだよ。話したって信じようとはしない」

アレックの肩にかかったゴードンの手に、ジエームズの手が重なった。三人はみんな同じ目をして、地面に一塊になって膝を付いていた。アレックは涙の滴り落ちるまま話し続けた。

「どんなにロバートを憎らしく思ったことか！ どんなに殺してやりたいと思つたことか！ 帰国したら一番にアイツに呪詛を吐きかけてやろうと思つた！ そう思つたのに！ ……なのに来なかつた。アイツを見たら途端にやる気が失せて……ああ、俺ってやつぱり……」

一瞬の間の後、彼は震えない声で言った。

「好きなんだな。まだロバートのことが」

地面に座り込んでいたアレックがそっと立ち上がった。ジエームズとゴードンが続いて立った。アレックは三人

の視線を頬に受け、遙か彼方を見つめてポツリと言った。「そうだ。知らなかったのはロバートだけじゃなかった。俺だってそうだ。実際に戦うまで分からなかった。俺だって無知だったんだ、ついさっきまで」

彼の声に熱が籠った。

「そうだ。考えるんだ。ただ知るんじゃない。考えて出した答えが本物なんだ」

アレックがそつと俺達を見つめた。そしてジエームズとゴードンの肩に触れ、優しく言った。

「ジエームズ、ゴードン。あの時は、ひどいことをしてごめん」

そして俺を見た。見つめる瞳には、深い慈しみと、ほんの少し申し訳なさそうな色が浮かんでいた。

「ごめんな、パーシー。ごめんなあ」

彼が歩き出した。暗闇の道をまっすぐ迷わず、美しく気高い足取りで進んでいった。彼のほっそりとした背が、俺達の目の中で遠のいていく。その時、ふと、夜の風に乗せてアレックの声が聞こえた気がした。

「大好きだよ、みんな。大好きだよ」

呼び止めなければいけない。そう思った。このままアレックを行かせたら、もう二度と彼には会えないような気がしたんだ。それなのに、俺もジエームズとゴードンも、何の声も出せなかった。

もう一つ、頭の中で声がしていたんだ。

このまま行かせてやりなさい。彼の決意を無駄にしてはいけない、と。

そしてその夜の内に、アレックは自殺した。

戦場で実際に使っていたあの短銃で、自分の頭を打ち

ぬいたのだ。朝の寝室で「大変よ、パーシー！ アレックちゃんがい！ アレックちゃんがい！」と泣き叫ぶ母を、俺は呆然として見つめた。

葬式は物悲しさよりも驚愕に満ちていた。軍神のように戦い、勝利をもたらした気高い戦士が自殺するなど、誰も夢にも思わなかっただろう。アレックは遺書を残していかなかった。彼は訳の分からない死を、人々に突然叩きつけたのだ。

ロバートもその中の一人だった。胸元に投げ出されたものを抱えるように両腕をだらりと突き出し、唇をパカッと開けて、彼は立っていた。俺が近づいていくと、彼はようやく両眼に光を取り戻した。

「パーシー」

と、掠れた声で彼は言った。

「なんで……なんでアレックが……」

それを聞いた時、一度は収まっていたロバートへの怒りが再び炎を噴くを感じた。俺にアレックの死を訪ねる無知なロバートが腹立たしくてしょうがなかった。

(こいつのせいで！ こいつのせいでアレックは……！)

胸の内の怒りを叩きつけるように、俺は言った。

「お前が死ねばよかったのに」

ロバートの色のない視線を受け、俺は彼に背を向けた。歩いていくと、墓地の出口のあたりに、ジエームズとゴードンが立っているのが見えた。二人は、昨夜のアレックと同じ瞳を俺に向けた。悲しみに覆われながらも、その奥に、探し求めていた答えがようやく分かったようなすつきりとした明るい色があった。そんな二人にも背を

向け、アレックの眠る土から俺は去っていった。残された俺に出来ることは、ただ自分の部屋のベッドで何時間も泣いて泣いて、泣き続けることだけだった。

あれから数か月。高校生という年でもなく、大学に行くだけの金もなかった俺は、父の知り合いの紹介もあって自動車メーカーに就職することとなった。給料は決して高くはないが、これといって不満もなく、俺はごく普通の暮らしを始めた。それでも、忙しい毎日が続く中、アレックを失った何とも言えない虚無感と、ロバートへの怒りだけは胸の中で燻り続けた。そんな日々を一年、二年と続け、俺はある日、レストランで相席になったアナンと恋仲になり、やがて結婚した。

ジエームズとゴードンは二人で家電か何かの会社に入り、ニューヨークの小さなアパートの同居していたらしい。彼らから毎週送られてくる手紙にそう書いてあった。そして彼らは、年に三回、世界中を旅行して回った。ヴェルダン、ソナム、第二次世界大戦の後は沖繩やノルマンディー、オシフィエンチム。旅に出る度、その風景写真を毎回、二人は俺に送ってよこした。観光には妙なチョイスだったし、二人はそこで現地の人々と話したり、子供達と遊んだり、壊れた家の修繕を手伝ったりとおよそ旅行者らしくないことばかりしていた。どうしてそんなことをしていたのか、俺にはさっぱり分からなかった。

そしてシシー。彼女もやがて結婚した。誰と？ そう、ロバートと。

彼女から電話でそのことを聞いた時は、驚きのあまりすつてんと飼い犬の尻尾の上に尻もちを付いてしまい、妻からこっぴどく叱られたほどだった。

シシーによると、あれからロバートは大学を卒業し、父の会社を大学時代の親友に託したらしい。その親友とというのが、中々頭が良く、人間としても出来た男であったそうだ。そしてロバートはあの石油会社の令嬢との婚約を破棄し、その親友に彼女を紹介した。それから彼は雑誌記者となり、反戦を主張する記事を書き始めたのだ。考えを正確に書くという才能を、彼は備えていたらしい。そしてそんな生活を送るうち、同じく記者として働いていたシシーと出会った。

「俺は反対だから」

久々に喫茶店で会ったシシーに俺はこう言った。彼女はそんな俺を、ころころと笑い飛ばした。

「子供みたいなこと言いなさんなよ、パーシー」

「分かってないくせに。アイツがどういう人間か、君は知らないだろ？」

「あら、知ってるわよ。全部彼は話してくれたもの」

シシーは自分の紅茶に砂糖を盛んに入れながら言った。「彼からプロポーズされた時、私そんなに驚かなかったわ。私はね、アレックの死から学んだの。次に私達がどうするか。だから、ロバートが私と結婚したとしても、それは当然のことだっただけで分かったもの。それにね、学ばないの問題じゃなくても、私、彼が好きだわ。あの人は分かっている。ジェームズ君やゴードン君と同じようにね」

シシーがいつもの癖で、髪を指で掻き上げた。あんなに長かった彼女の金髪は、顎のあたりではぼさり切り落とされていた。身につけている男物のようなジャケットとズボンが、ドレスよりもはつきりと彼女を綺麗に見せていた。

「でも、アイツの方は君を愛してるのか？」

「当たり前じゃないの」

俺の質問に、彼女は強く言った。

「あんたねえ、私にごめんの一言もないの？ アレックはちゃんとやってくれたわよ。あの時、私は本当の意味で彼を愛したわ。その愛が、そのままロバートと私に引き継がれたの。ねえ、パーシー。あんたいい加減に歩きなさいよ。そのままじつと座っていると、足、動かなくなるわよ」

二人の結婚式で、俺はロバートに数年ぶりに再会した。

彼の目は変わっていた。無限にも広がる色をしていた。

あの夜のアレックの色。墓地に立っていたジェームズとゴードンの色。それと同じ色。そんな目が俺は何となく怖くて、ロバートとシシーをまともに見ることが出来なかった。

「勝利なき平和」も叶わず静かな憎しみが籠る中、黄金の二十年代は過ぎていった。短いスカートに短い髪的女と、やたら陽気な男がこぞって飲み、歌い、ジャズに合わせてチャールストンを躍った。

俺達も青年とは呼べない年齢になり、やがて父親になった。俺とアンナの間にはステイブンが、ロバートとシシーの間にはオリヴァーが生まれた。あれからロバートはよく俺を訪ねるようになった。片手に抱いた息子に頬を抓られながら、彼は俺と静かに話した。「最近どう？」とか「寒くなつて来たね」とか「ちよつと息子がさ」と

か。アレックの話も少しした気がする。

それからしばらくすると、ジェームズとゴードンから主産祝いのカードが届いた。

「かわいい赤ちゃん！ 君に永遠の笑いと恵がありますよう！ 何にも勝る君は世界の宝！」

そう書かれたカードから、オリブの香りがした。

世界恐慌は何か乗り切ったが、やがてやって来た二回目の世界大戦からは逃げきれなかった。クロス一家は戦争に頑として反対したが、結局彼らだけではどうしようも出来なかった。ロバートはジャーナリストをクビになり、オリヴァーも泣く泣く兵隊に行った。あの子は、二人目のアレックとなつてしまったのだな。

ステイブンは、今は何ともないのだが、あの頃は少し胸が悪くてな。おかげで兵士に選ばれずにすんだ。そのこともあって、俺は第二次世界大戦からはひたすら目を背けることが出来た。虐殺されたユダヤ人も、ノルマンディーでの戦いも、ヒロシマとナガサキを焼き殺した核爆弾も、俺は聞かないようにした。

やがてそんな戦争も再び勝利で終わり、俺もロバートもまた一段と老け込んだ。あれからしばらく、ロバートは別の仕事で食いつないでいたが、戦後は記者に戻れたらしいな。「ああ、よかった」と言っていた。しかしオリヴァーが自殺してから、彼はひどくやつれてしまった。そしてその分孫のお前に目に入れても痛くないほど、愛情を注いだ。

そしてあの頃からだろうか。あの若い日に、足に受けた傷が何の原因か急にぶり返し、俺は片足を引き摺って歩くようになった。この足だけが、執拗に俺に過去を連れてくる。アレックの顔が浮かんでくる。

やがて俺達も老人になっていった。俺の故郷の月並みな街は、明るいカラフルなネオンの街へいつの間にか変わってしまった。世界から少しずつ、俺達は消えていった。

ジェームズとゴードンは二年前に死んだ。結局結婚は出来なかったらしいが、最後まで二人は共にあった。二人からの最後の写真は、アルゴンヌの青々とした美しい森だった。

シシーも死んだ。棺の中の彼女は安らかな顔をしていた。

そしてロバートも死んだ。彼の葬式には行かなかった。ロバートの死は、俺にとってアレックの死よりも受け入れられないものだった。あれほど憎んだ彼が、死んでほしいと願った彼が、あんなにも小さくなって死んでしまったのが信じられなかった。

役目を終えたように穏やかにすっきりとみんな死んでいった。俺だけが残った。あの懐かしい夏の日々がまだ消え去らないまま。俺だけがここに残った。

最早何時間たったのか、レイには分からない。彼はただじっと目の前の二十歳の青年を見つめた。

「パーシー」

レイの唇がやがて動いた。

「俺を見て。パーシー。俺を見て」

「見てるよ」

「嘘だ。目をつぶってるじゃないか」

パーシーの顔の裏を、レイは理解していた。夏。川。

自転車。アイスクリーム。シェイクスピア。レイは優しく青年に言った。

「パーシー。今でもロバートが憎いのか？」

「俺が断ち切れ、濁った瞳がぐるりとレイを見た。」

「分かんねえ」

掠れた声と言った。

「怒る気力も時間が持つてちゃったのかもなあ。だけどロバートを思い出す度にどうしてもこう思っちゃうんだ。アイツは何も知らなかった、知らずに俺達を駆り立てたって」

「それは違うよ、パーシー」

レイの声が青年の目をはっきりと開かせた。

「もう違うんだよ、パーシー。ロバートは考えた。シシーもゴードンもジェームズも考えて答えを出した。ロバートはそして後悔したんだ。答えを見つけ出すのに、アレックを彼は死なせてしまった。だから俺には、話すことが大事だと教えたんだ。でも、パーシー。君はどのような？ 君は何を思っているの？ 何を考えたの？」

パーシーは何も言わない。何も語らない。

「そんなにじいちゃんやんが憎いと思っていたんなら……」

レイが言った。声には、ほんの少し幼さが入り込んでいる。

「どうして俺を家族にしてくれたの？」

その時、青年は消えた。あの震えるような青年の代わりに老人が座っていた。彼の瞳から夏の濁った色はなく、透き通った瞳が、あるがままのレイを真っ直ぐ映していた。

「お前が……あのロバートの孫だと知っていても……どうしてもお前が……」

老人の皺だらけの顔を、涙が伝っていく。生の温もり

の籠る手が、レイの手を掴んだ。

「可愛くて……可愛くて仕方がない。守ってあげたい。」

幸せになって欲しい……そんな思いが溢れて止まらない

……」

レイはそっと祖父を抱擁した。何度も止まりかけたであろう心臓が、胸の下で脈打っていた。この人に対する恨みも怒りも、何もなかった。あの混乱と恐怖の中で蹲っていた青年は次の階へ行ったのだ。かつてロバートが語ったように。こうして青年を連れ出したのは、自分だっただろうか、とレイは思った。

「歩けるよ。まだ歩けるよ」

レイが何度も言った。

祖父が顔を上げた。透明だった瞳に、新たな色が生まれていた。アレック・バルダーソンが死の直前宿していたであろうあの色だ。

「ああ、そうだったのか」

パーシー・スタンプスが笑って言った。

「アレック。そうだったのか」